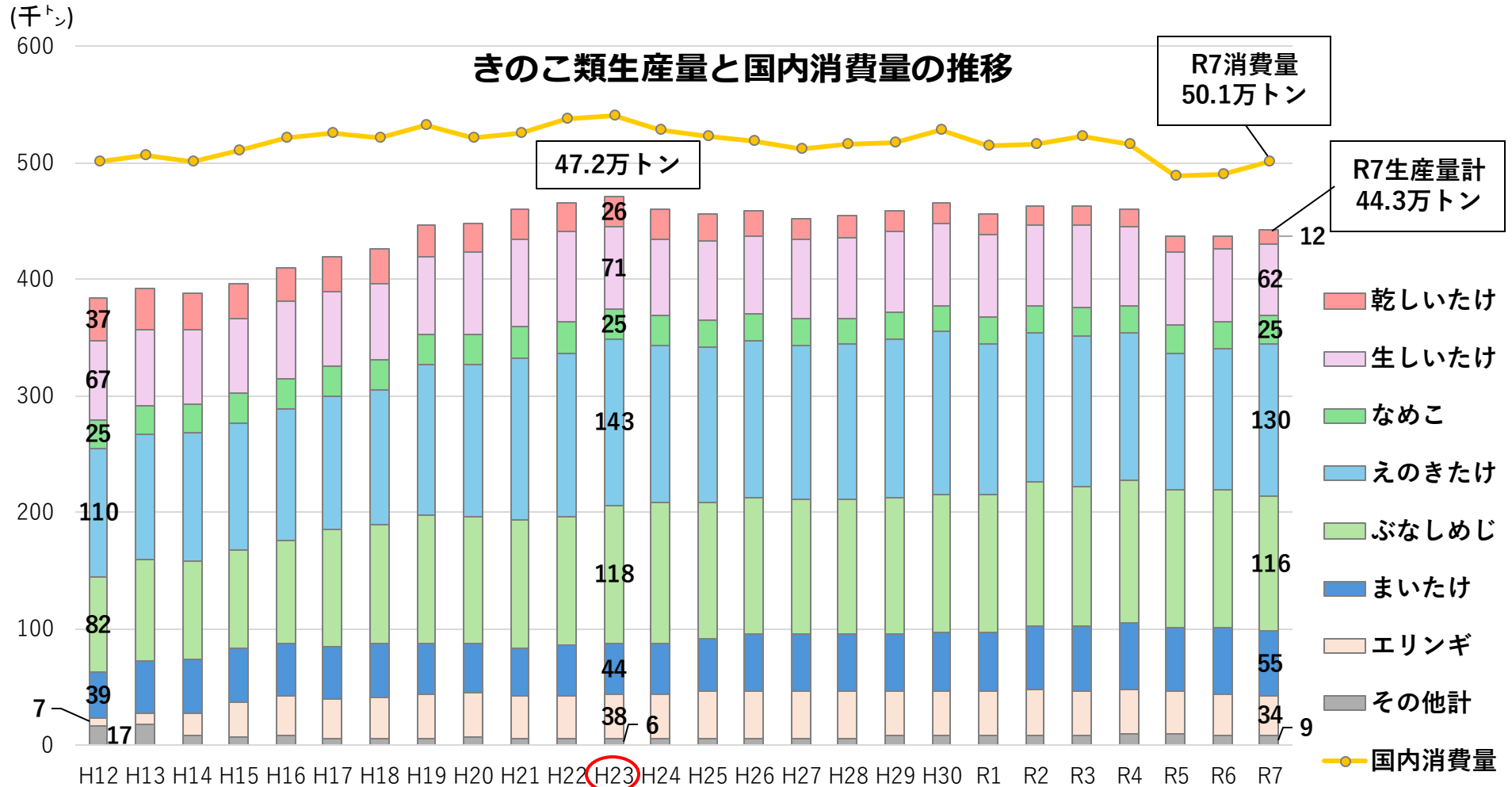


きのこ生産をめぐる状況

林野庁経営課特用林産対策室

きのこ類の生産動向

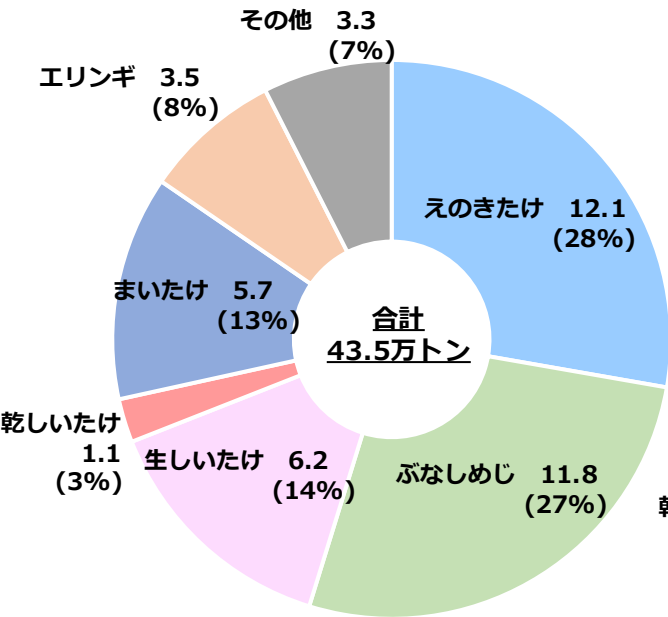
- きのこ類の生産量は、平成23年に47.2万トンまで増加し、その後おおむね横ばいで推移。
- 令和7年の生産量は44.3万トンと前年に比べ増加。きのこ類全体で1.8%増加。
- 令和7年国内消費量50.1万トンの88%を国内生産量が占めている。



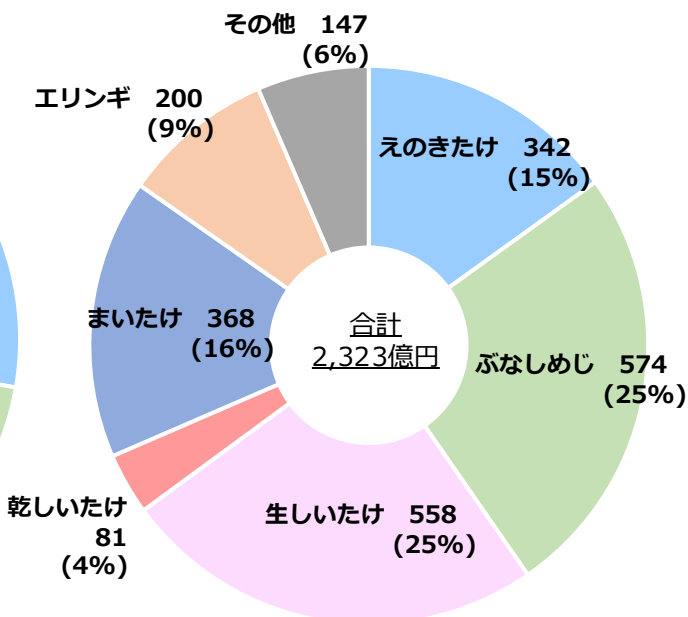
きのこ類の生産量及び生産額

- きのこ類の生産量は、近年ほぼ横ばいで推移してきており、令和6年は43.5万トン。
- 生産量では、えのきたけ、ぶなしめじ、しいたけの順であるが、生産額ではぶなしめじがトップ。
- 生産量第1位の都道府県は、生しいたけが徳島県、乾しいたけが大分県、えのきたけ、ぶなしめじは長野県。

令和6年生産量(万トン)



令和6年生産額(億円)



品目別生産量上位県

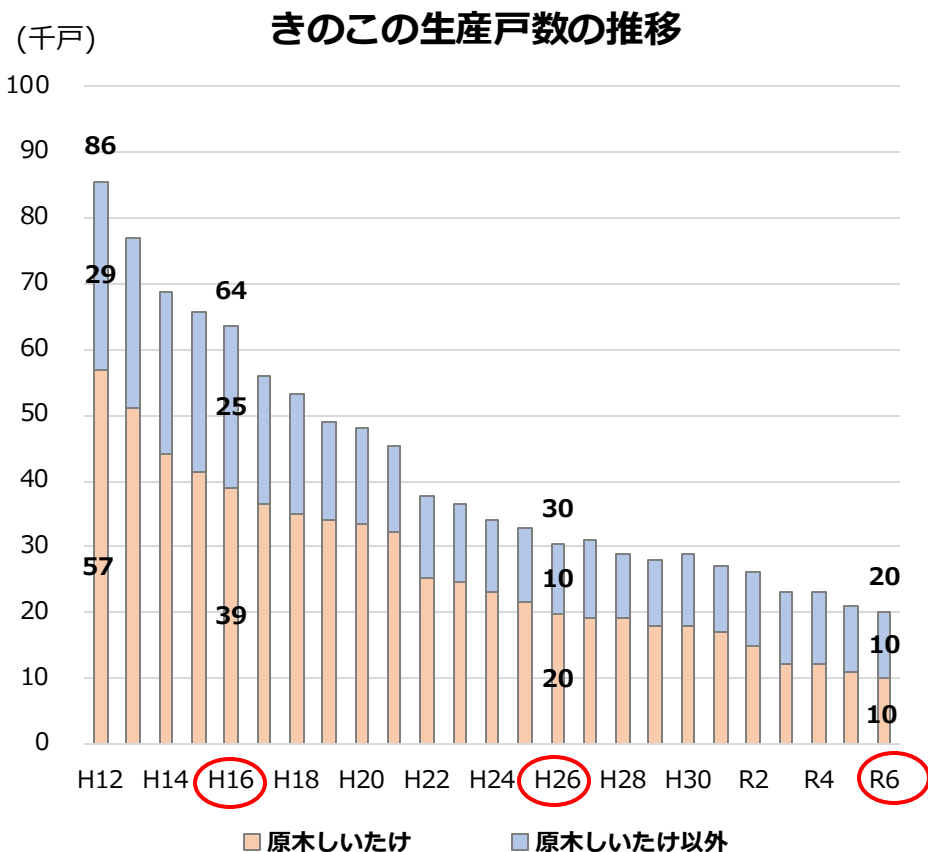
生しいたけ			乾しいたけ		
1	徳島県	7.0千t	1	大分県	554t
2	岩手県	4.0千t	2	宮崎県	270t
3	群馬県	4.0千t	3	熊本県	147t
4	福島県	3.9千t	4	岩手県	94t
5	秋田県	3.6千t	5	愛媛県	71t

えのきたけ			ぶなしめじ		
1	長野県	7.1万t	1	長野県	4.7万t
2	新潟県	1.8万t	2	新潟県	2.3万t
3	宮崎県	0.7万t	3	福岡県	1.5万t
4	福岡県	0.5万t	4	香川県	0.5万t
5	北海道	X	5	富山県	X

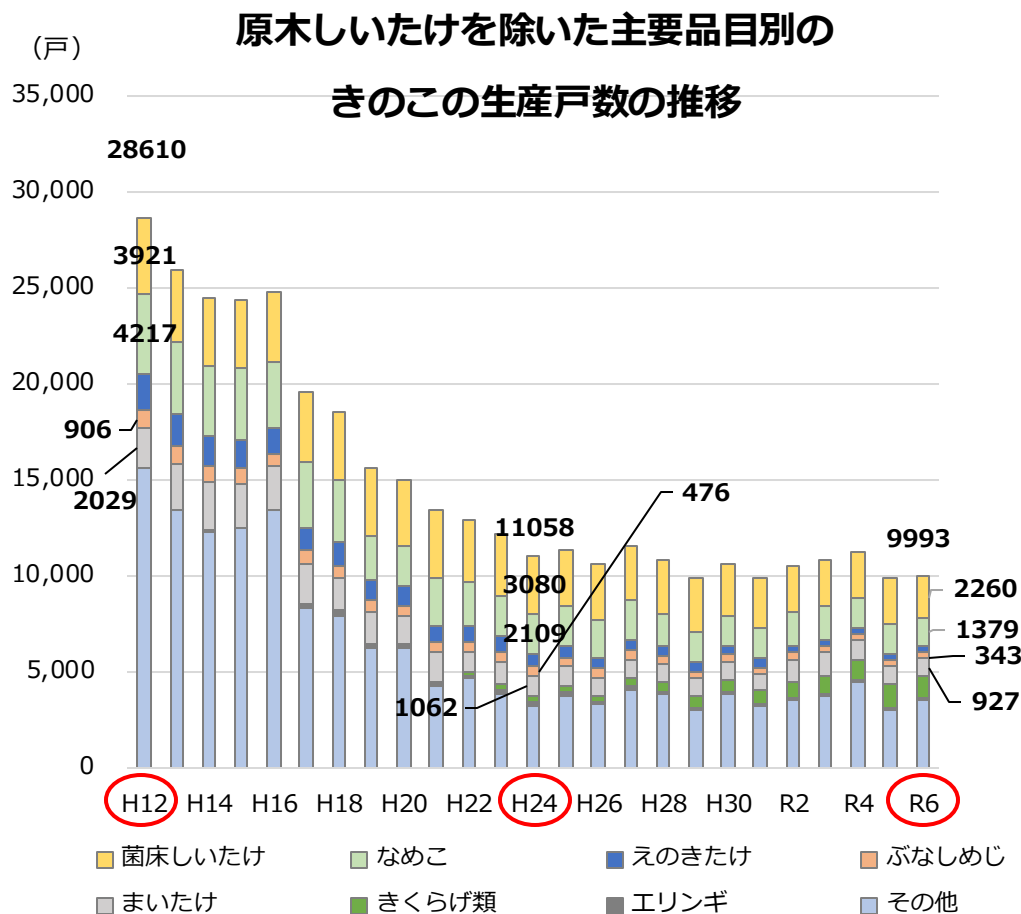
資料：農林水産省「特用林産基礎資料」、農林水産省「令和6年林業産出額」
注1) 乾しいたけは生重量換算値

きのこ生産者数の推移

- ❑ きのこの生産戸数は約2万戸。うち約1万2千戸をしいたけ生産者、さらにそのうち約1万戸を原木しいたけ生産者が占める。
- ❑ 原木しいたけ生産者数は過去10年間で約2分の1、20年間で約4分の1に減少。
- ❑ その他品目の生産者数も減少傾向にある一方、近年、きくらげ類の生産者数が増加している。



資料: 農林水産省 「特用林産基礎資料」



注1) エリンギ生産者数は平成17年より調査のため、平成16年以前はデータなし
注2) その他は主にまつたけ生産者

きのこの品目による栽培工程の違いについて

- しいたけの原木栽培は、駒打ちや、伏込み、収穫など人力で行う作業が多い。
- 菌床栽培では、機械化が進んでおり、特にえのきたけやぶなしめじの大規模生産者の生産工程の大部分が機械化。

しいたけ(原木)

<植菌>



駒打(植菌)

<培養・発生>



伏込み



発生

<収穫・包装>



収穫



包装

しいたけ(菌床)

一部機械化



詰込、殺菌

一部機械化



種菌接種

<培養・発生>



培養



発生

<収穫・包装>



収穫



包装

えのきたけ(菌床)

機械化



詰込、殺菌

機械化



種菌接種

<培養・発生>

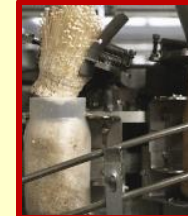


培養



発生

機械化



収穫

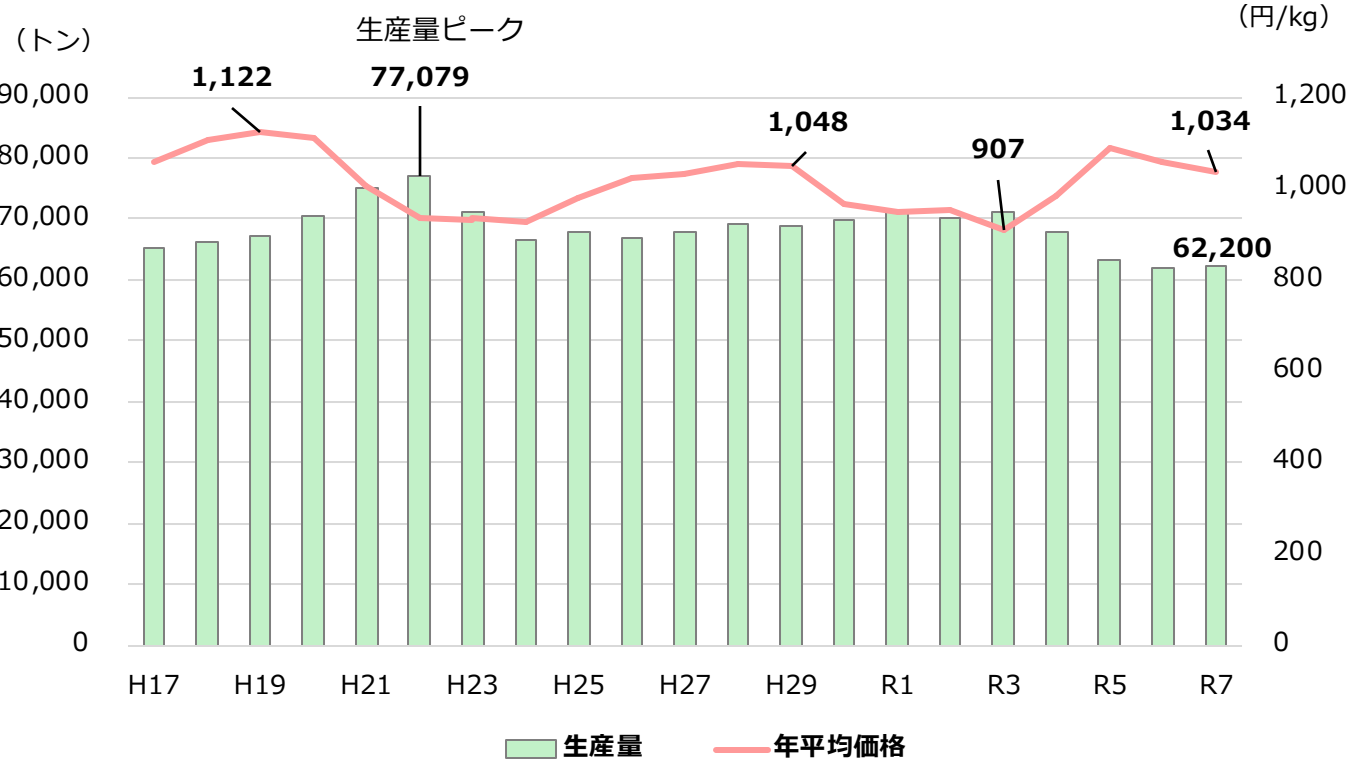


包装

生しいたけの生産動向

- 生しいたけの生産量は、平成22年をピークにほぼ横ばいで推移してきたが、令和3年以降は減少傾向。
- 一方で、卸売価格は、令和3年以降上昇し、令和5～7年も年平均で1,000円/kgを超える水準を維持。

生しいたけの生産量・年平均価格の推移



資料：農林水産省「特用林産基礎資料」
注1) 令和7年生産量は概算値
注2) 価格は東京都中央卸売市場年平均価格

原木生しいたけの生産量上位県

R6生産量 (トン)		
1	静岡県	332
2	茨城県	301
3	群馬県	297
4	鹿児島県	281
5	熊本県	189
全国計		3,272

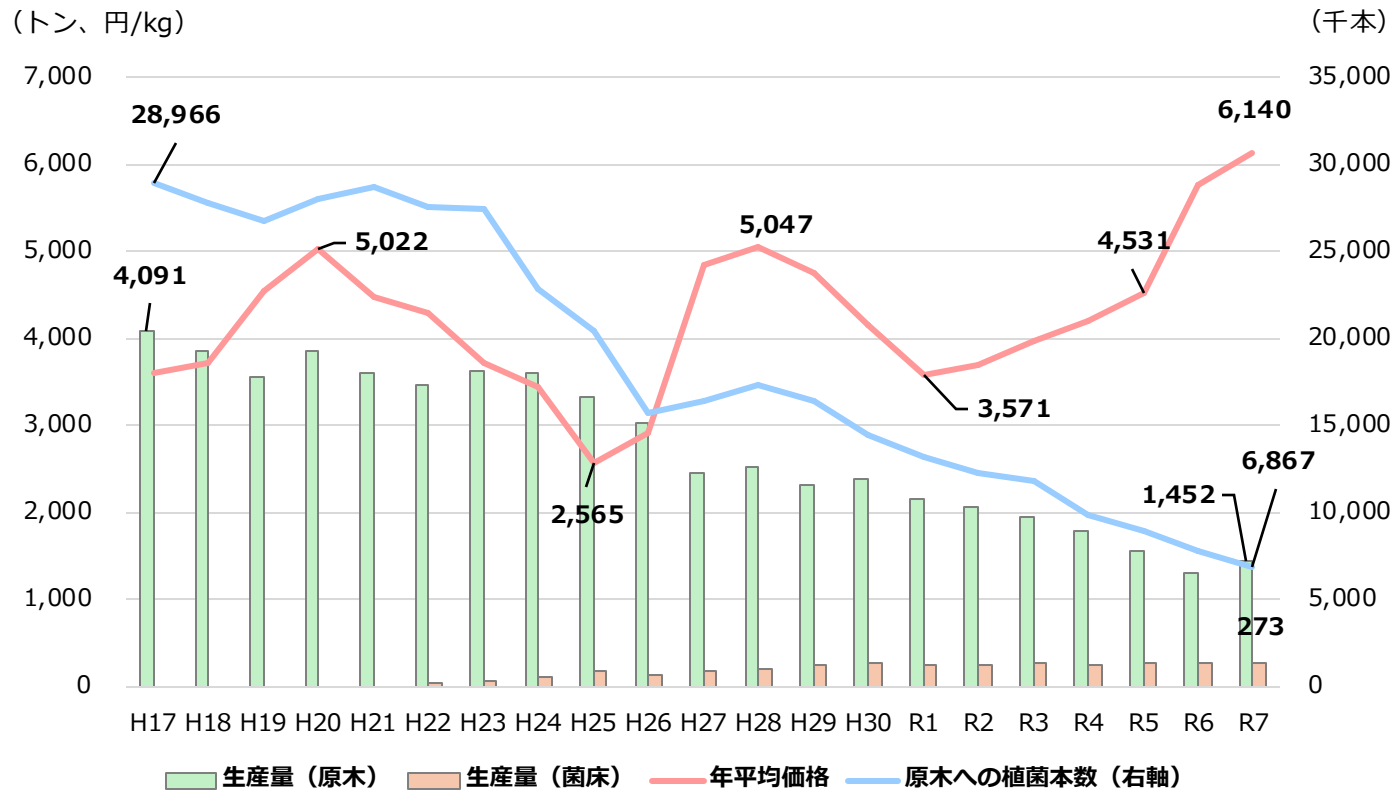
菌床生しいたけの生産量上位県

R6生産量 (トン)		
1	徳島県	7,018
2	岩手県	3,988
3	福島県	3,790
4	群馬県	3,687
5	北海道	3,471
全国計		58,688

乾しいたけの生産動向

- ❑ 乾しいたけの生産量は、年々減少。生産量の多くが原木栽培だが、菌床乾しいたけの生産量が増加傾向。
- ❑ 卸売価格は、近年上昇傾向であり、令和7年は6,000円を超える水準まで上昇。植菌本数は長期的に減少傾向。

乾しいたけの生産量・年平均価格・植菌本数の推移



原木乾しいたけの生産量上位県

R6 生産量 (トン)

1	大分県	549
2	宮崎県	255
3	熊本県	147
4	愛媛県	64
5	岩手県	60
全国計		1,306

菌床乾しいたけの生産量上位県

R6 生産量 (トン)

1	岩手県	34
2	岐阜県	28
3	長崎県	24
4	群馬県	21
5	北海道	19
全国計		267

資料: 農林水産省 「特用林産基礎資料」

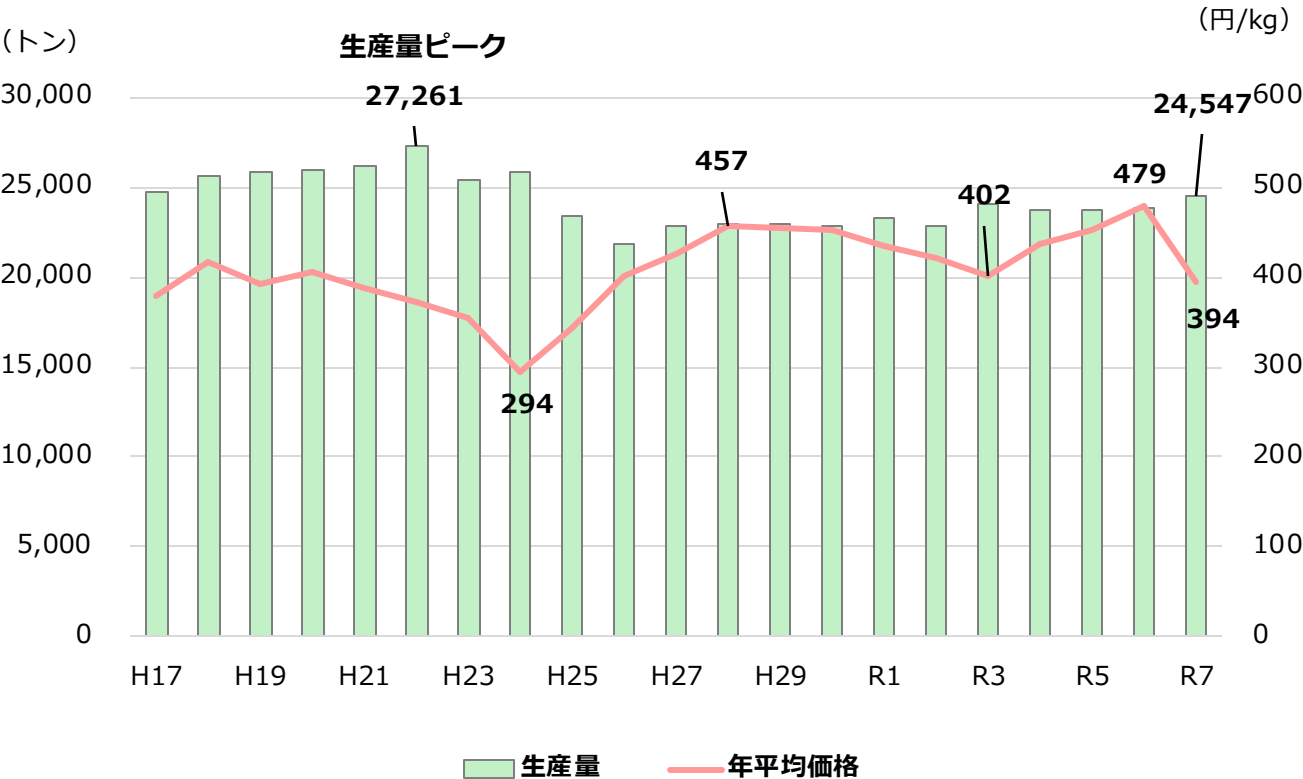
注1) 令和7年生産量は概算値

注2) 価格は全国主要市場における年平均価格 (全品柄の平均価格)

なめこの生産動向

- なめこの生産量は、平成22年をピークに減少傾向で推移してきたが、平成26年以降は増加傾向。
- 卸売価格は平成24年以降は上昇傾向にあったが、令和7年は394円/kgに下落した。

なめこの生産量・年平均価格の推移



なめこの生産量上位県

R6生産量 (トン)		
1	新潟県	5,545
2	長野県	5,101
3	山形県	4,081
4	福島県	1,697
5	北海道	1,260
全国計		23,874

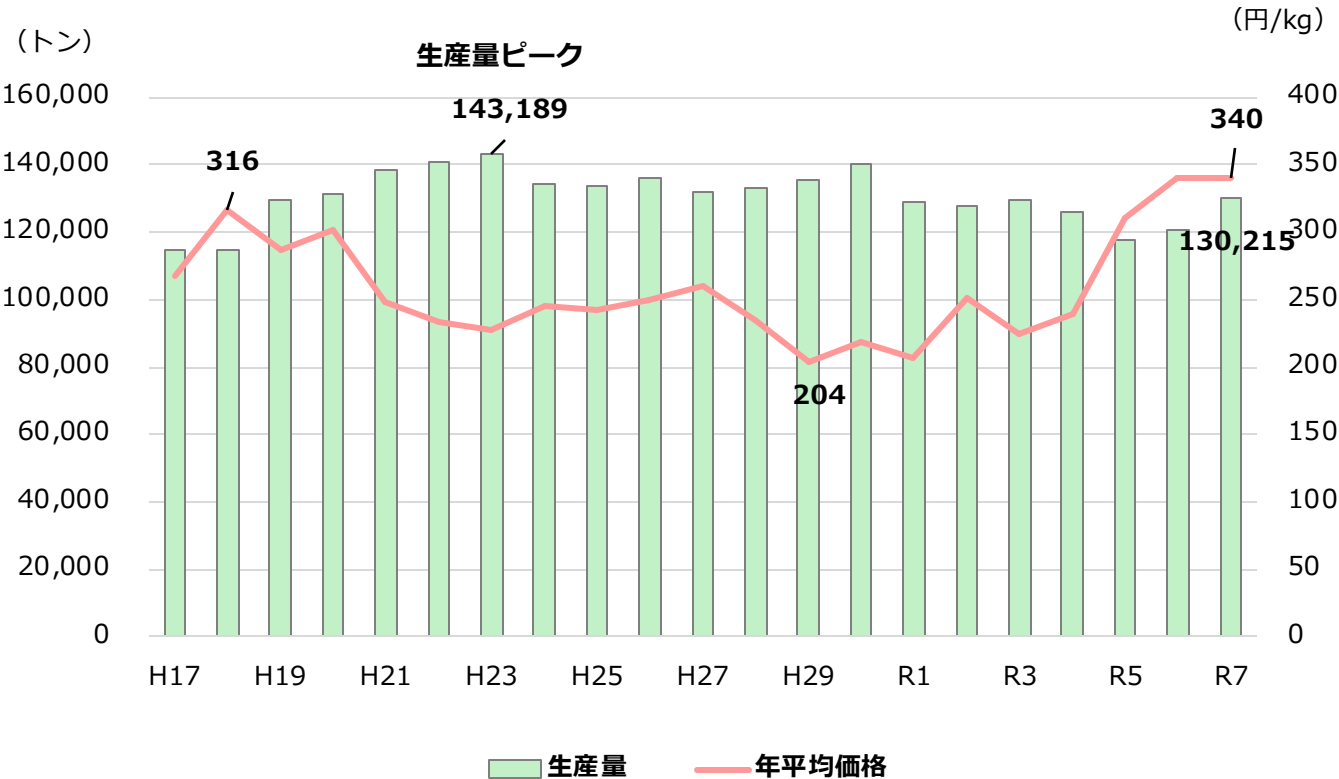
	H21	H26	R1	R6
生産者数 (戸)	2,507	1,995	1,577	1,379
1戸あたりの生産量 (トン)	10.4	10.9	14.8	17.3

資料：農林水産省「特用林産基礎資料」
注1) 令和7年生産量は概算値
注2) 価格は東京都中央卸売市場年平均価格

えのきたけの生産動向

- えのきたけの生産量は、平成23年をピークにはほぼ横ばいで推移してきたが、令和7年は前年から約1万トン増加。
- 卸売価格は令和3年以降上昇傾向にあり、令和7年は340円/kg。

えのきたけの生産量・年平均価格の推移



えのきたけの生産量上位県

R6生産量 (トン)		
1	長野県	71,068
2	新潟県	18,364
3	宮崎県	6,547
4	福岡県	5,413
7	大分県	2,670
全国計		120,678

※ 5位北海道、6位長崎県は秘匿措置により
生産量非公表

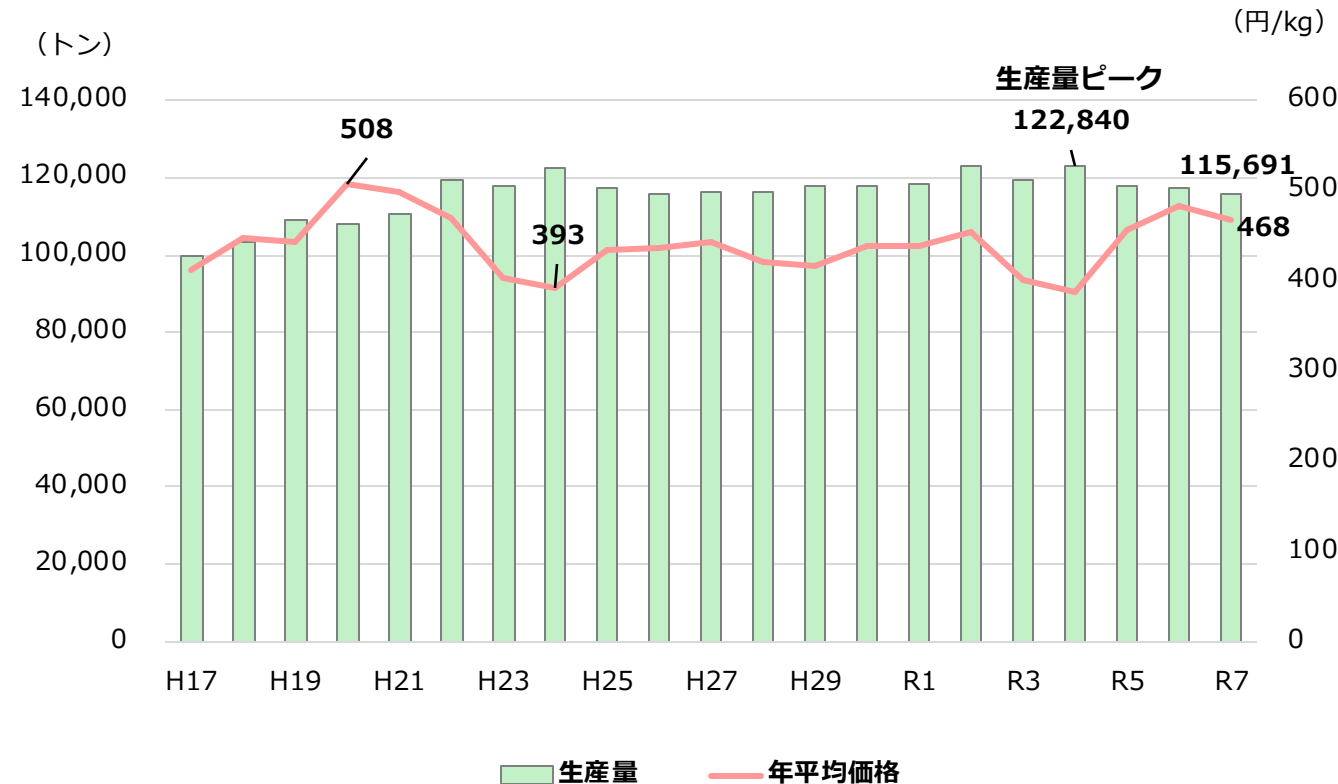
	H21	H26	R1	R6
生産者数 (戸)	827	611	446	354
1戸あたりの生産量 (トン)	167.5	222.5	289.2	340.9

資料：農林水産省「特用林産基礎資料」
注1) 令和7年生産量は概算値
注2) 価格は東京都中央卸売市場年平均価格

ぶなしめじの生産動向

- ぶなしめじの生産量は近年はほぼ横ばいで推移してきており、令和4年の122,840トンがピーク。
- 卸売価格は令和4年以降おおむね上昇傾向にあり、令和7年は468円/kg。

ぶなしめじの生産量・年平均価格の推移



ぶなしめじの生産量上位県

R6生産量 (トン)

1	長野県	47,429
2	新潟県	22,650
3	福岡県	15,255
4	香川県	5,111
6	茨城県	3,077
全国計		117,536

※ 5位富山県は秘匿措置により生産量非公表

	H21	H26	R1	R6
生産者数 (戸)	547	437	388	343
1戸あたりの生産量 (トン)	202.5	264.9	305.7	342.7

資料：農林水産省「特用林産基礎資料」

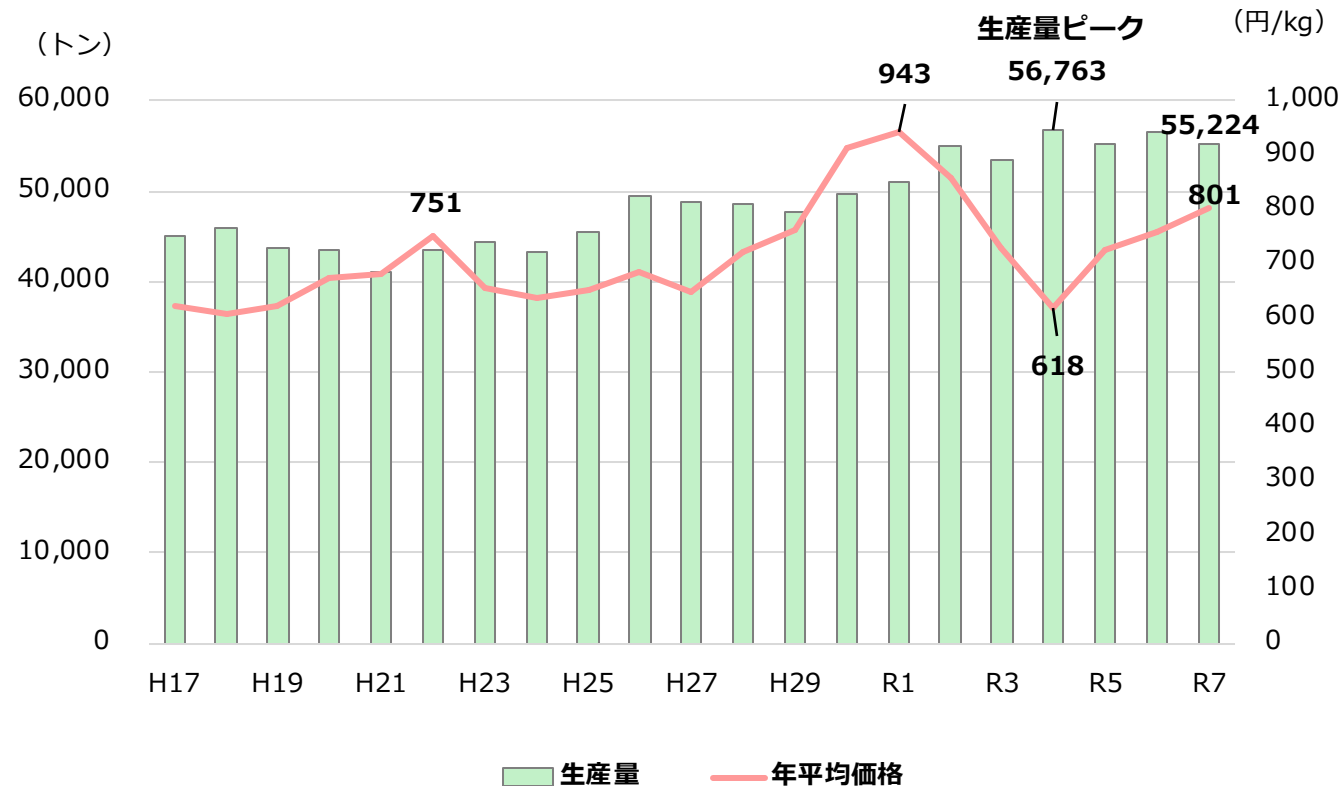
注1) 令和7年生産量は概算値

注2) 価格は東京都中央卸売市場年平均価格

まいたけの生産動向

- まいたけの生産量は平成29年以降は増加傾向にあり、令和4年の56,763トンがピーク。
- 卸売価格は令和元年にピークの943円/kgとなり、その後は下降していたが令和7年は801円/kgまで上昇した。

まいたけの生産量・年平均価格の推移



まいたけの生産量上位県

R6生産量 (トン)

1	新潟県	35,597
2	静岡県	4,889
3	福岡県	3,690
4	三重県	2,925
5	長野県	2,479
全国計		56,609

	H21	H26	R1	R6
生産者数 (戸)	1,563	924	825	927
1戸あたりの生産量 (トン)	26.2	53.6	61.9	61.1

資料：農林水産省「特用林産基礎資料」

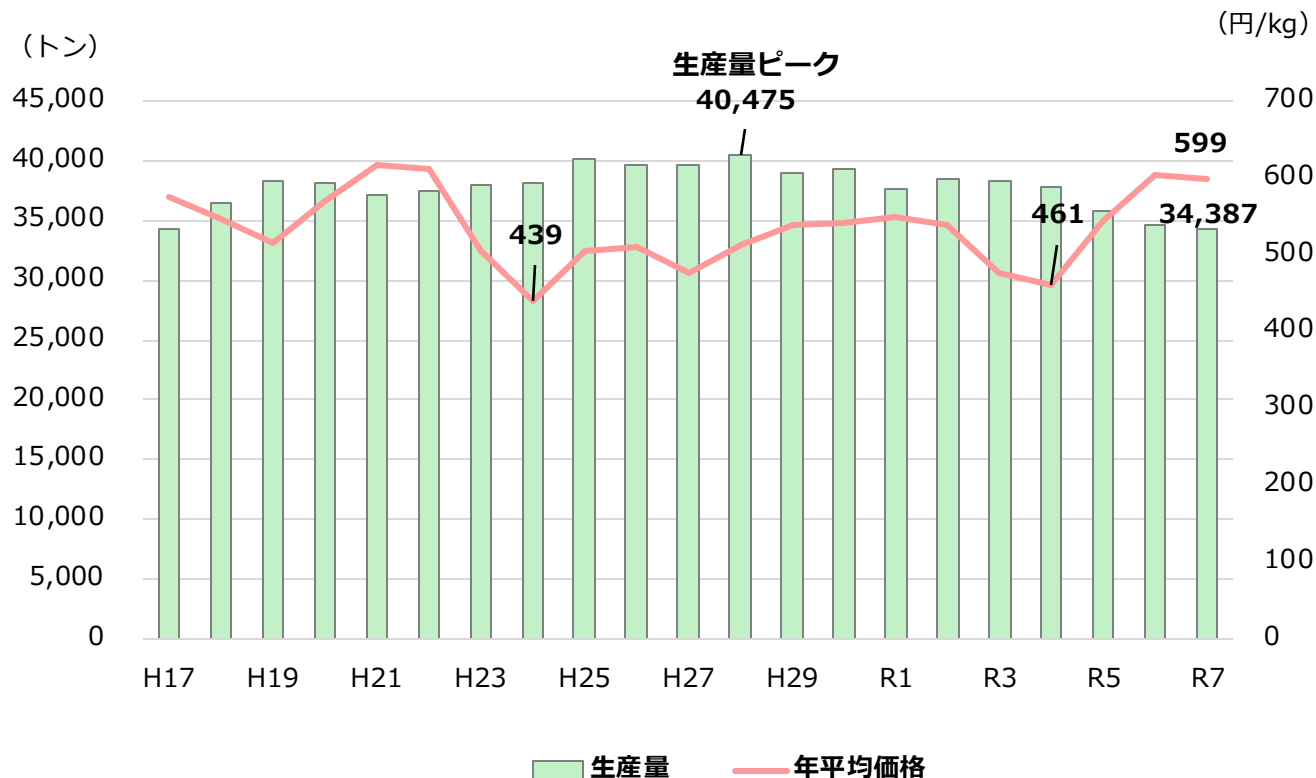
注1) 令和7年生産量は概算値

注2) 価格は東京都中央卸売市場年平均価格

エリンギの生産動向

- エリンギの生産量は、ほぼ横ばいで推移してきたが、平成28年をピークに減少傾向。
- 卸売価格は令和4年以降上昇傾向にあり、令和7年は599円/kg。

エリンギの生産量・年平均価格の推移



エリンギの生産量上位県

R6生産量 (トン)		
1	長野県	14,822
2	新潟県	11,726
3	福岡県	1,799
4	熊本県	387
5	鳥取県	333
全国計		34,639

	H21	H26	R1	R6
生産者数 (戸)	148	137	105	121
1戸あたりの生産量 (トン)	251.5	189.4	358.4	286.3

資料：農林水産省「特用林産基礎資料」

注1) 令和7年生産量は概算値

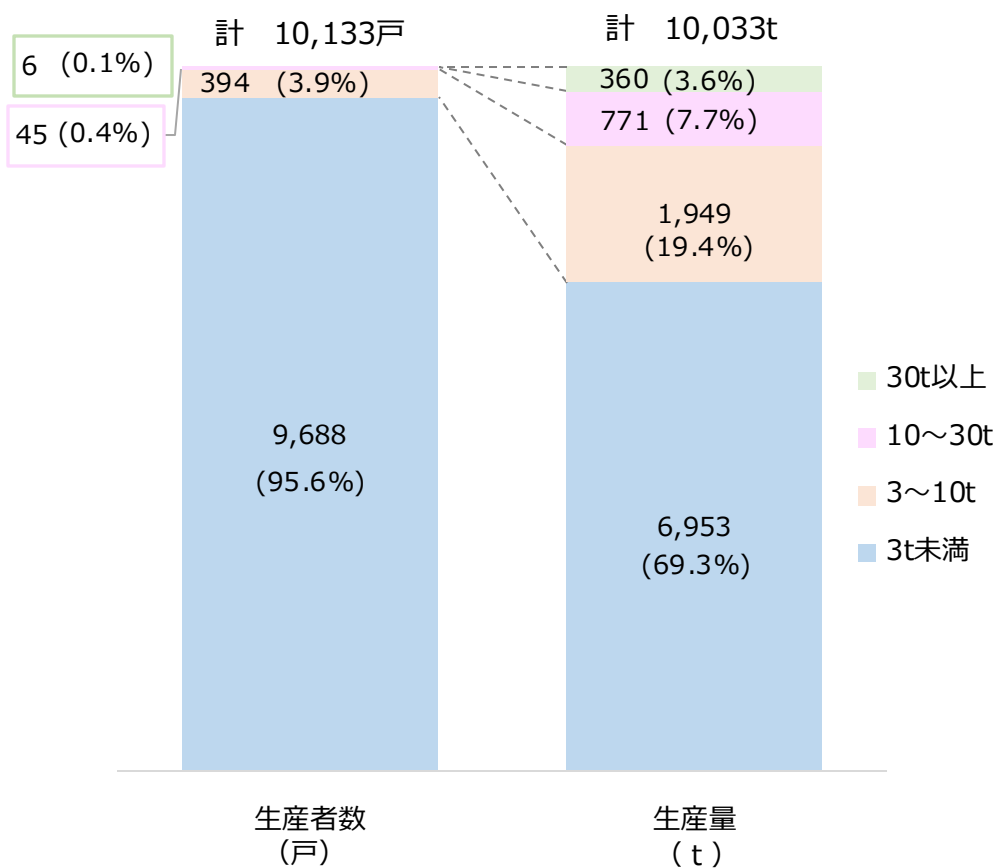
注2) 価格は東京都中央卸売市場年平均価格

きのこの品目ごとの生産規模別生産者数（しいたけ）

- しいたけについては、原木栽培は小規模生産者（3t未満）が9割以上を占め、その生産量は約7割を占めている。
- 菌床栽培では、100t以上の生産者による生産量が過半を占める。

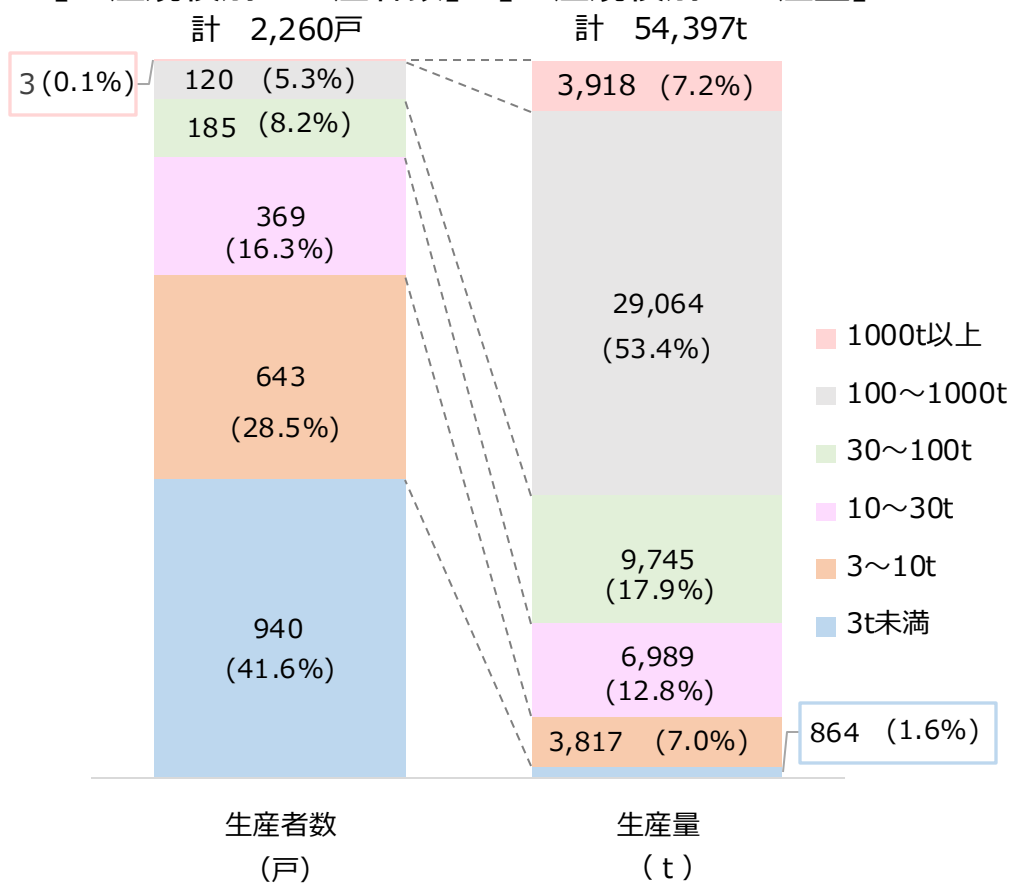
○ 原木しいたけ

【生産規模別の生産者数】 【生産規模別の生産量】



○ 菌床しいたけ

【生産規模別の生産者数】 【生産規模別の生産量】



資料：特用林産物生産統計調査をもとに林野庁で推計

注1) 乾しいたけは生重量換算値

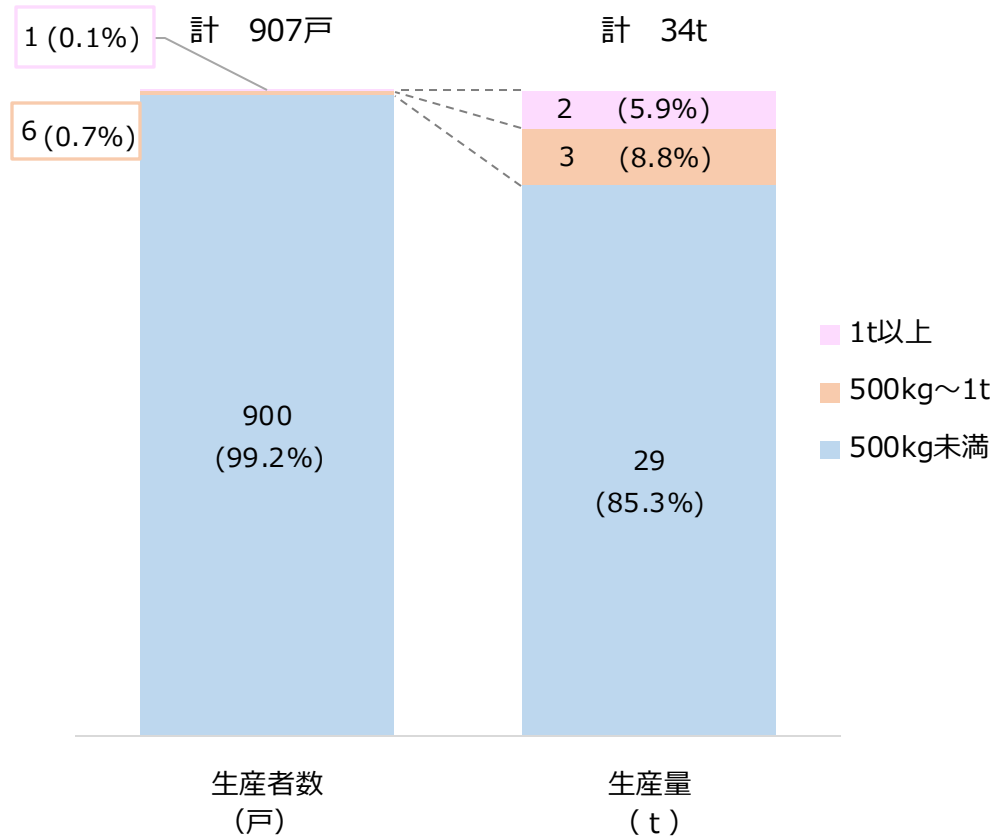
注2) 生産者戸数の計上が無い客体からの生産量計上値を含まないため、生産量合計値は公表値と異なる

きのこの品目ごとの生産規模別生産者数（なめこ）

- 原木なめこについては、ほとんどが1t以下の小規模生産者であり、その生産量も9割以上を占めている。
- 菌床なめこについては、100t以上の生産者による生産量が約9割を占める。

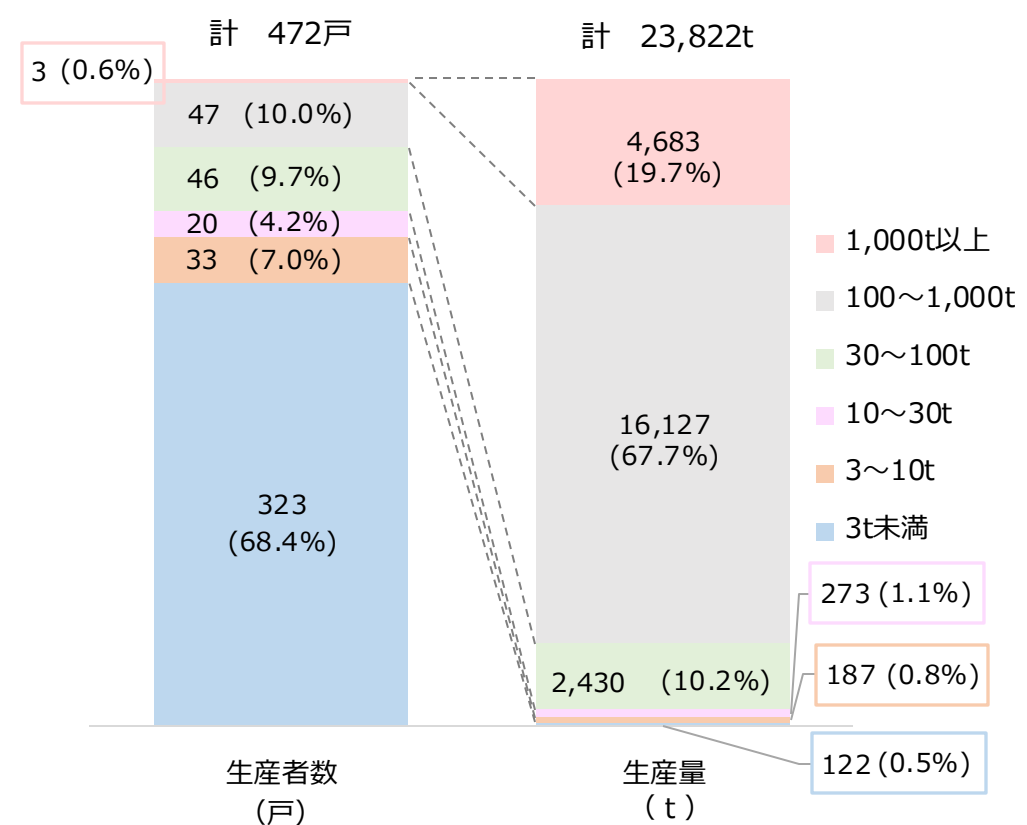
○原木なめこ

【生産規模別の生産者数】 【生産規模別の生産量】



○菌床なめこ

【生産規模別の生産者数】 【生産規模別の生産量】



資料：特用林産物生産統計調査をもとに林野庁で推計

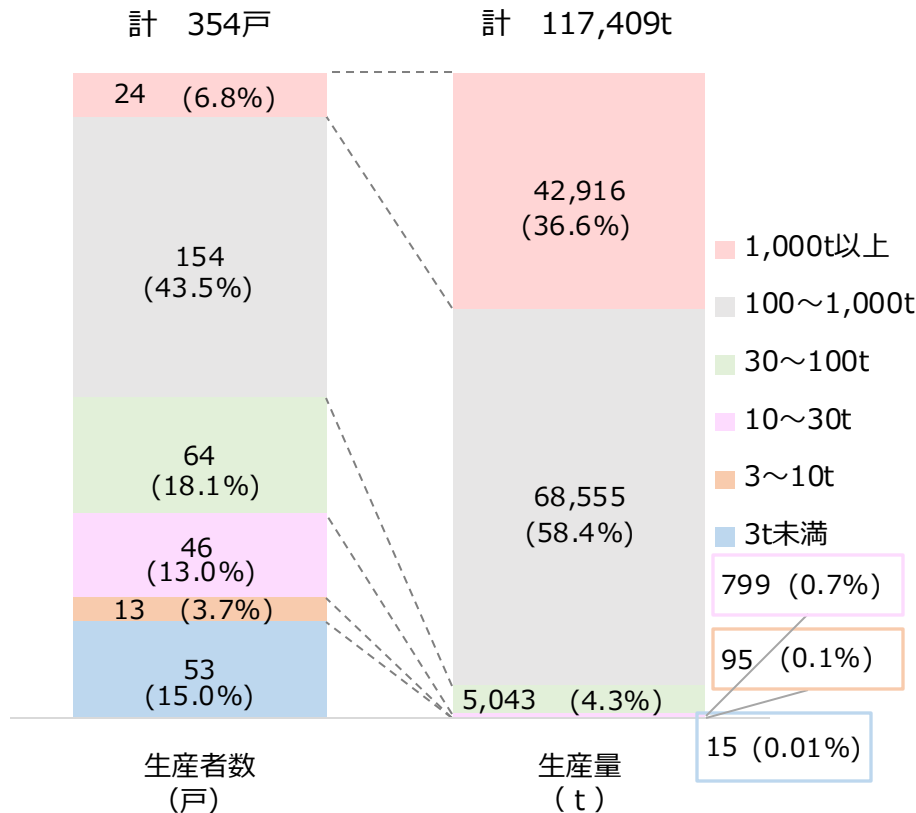
注1) 生産者戸数の計上が無い客体からの生産量計上値を含まないため、生産量合計値は公表値と異なる

きのこの品目ごとの生産規模別生産者数（えのきたけ、ぶなしめじ）

- えのきたけ、ぶなしめじについては、100t以上の生産者による生産量が9割以上を占める。

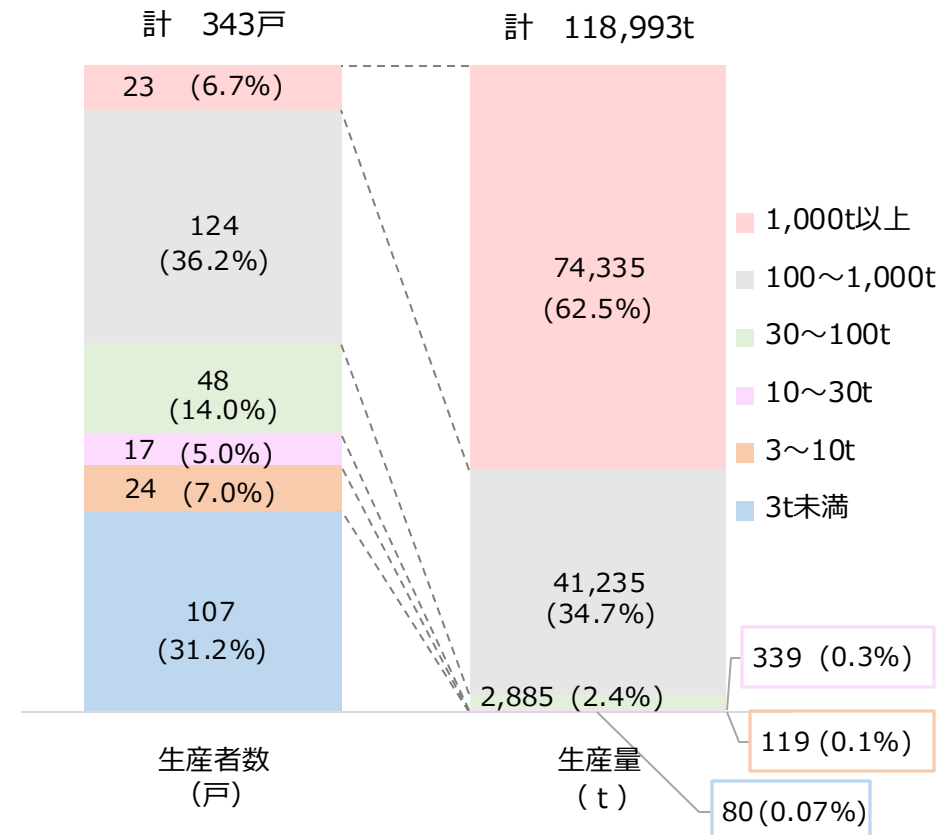
○えのきたけ

【生産規模別の生産者数】 【生産規模別の生産量】



○ぶなしめじ

【生産規模別の生産者数】 【生産規模別の生産量】



資料：特用林産物生産統計調査をもとに林野庁で推計

注1）生産者戸数の計上が無い客体からの生産量計上値を含まないため、生産量合計値は公表値と異なる

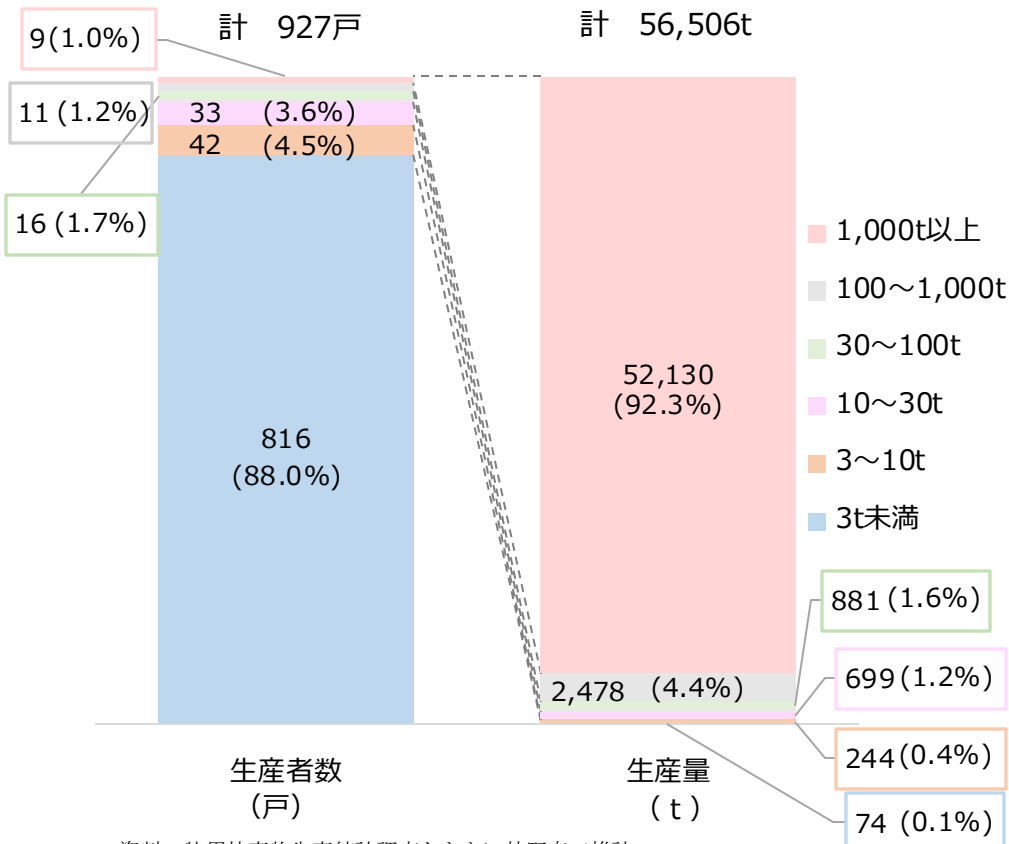
注2）一部集荷業者、生産者での重複計上を含む

きのこの品目ごとの生産規模別生産者数（まいたけ、エリンギ）

- まいたけ、エリンギについては、1,000t以上の大規模生産者による生産量が9割以上を占めている。

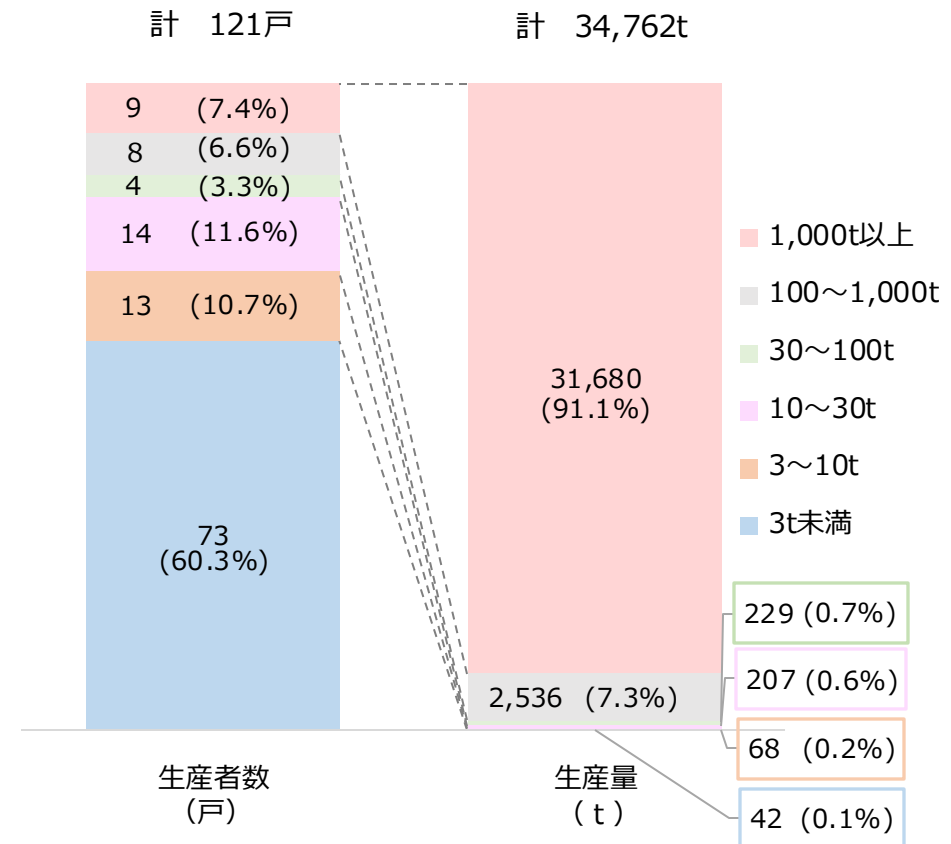
○まいたけ

【生産規模別の生産者数】 【生産規模別の生産量】



○エリンギ

【生産規模別の生産者数】 【生産規模別の生産量】

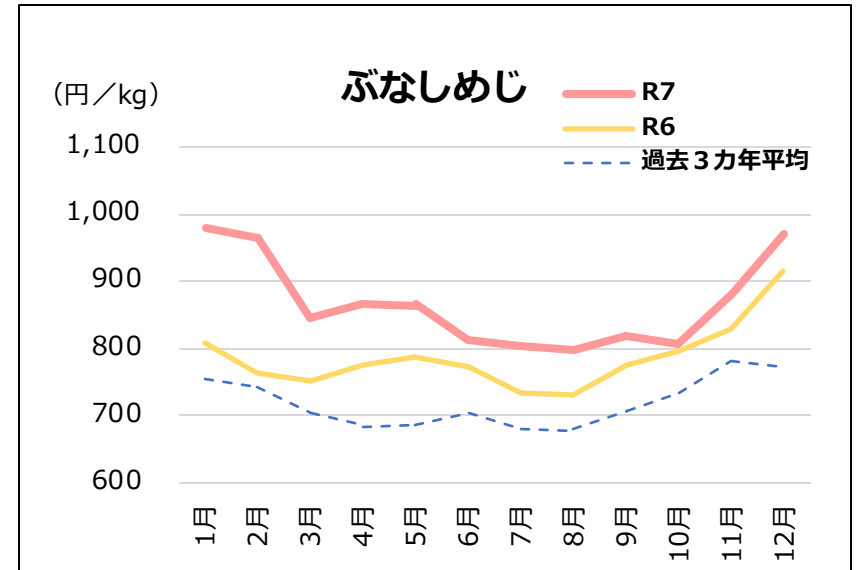
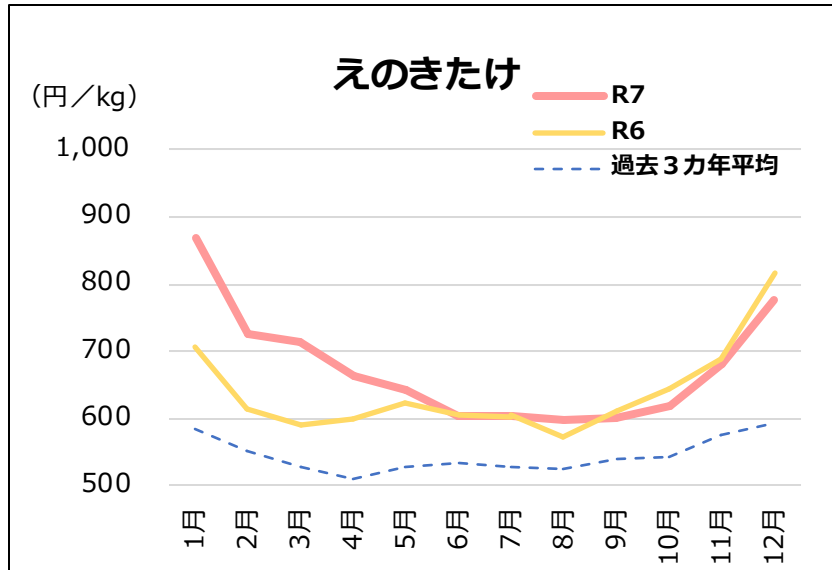
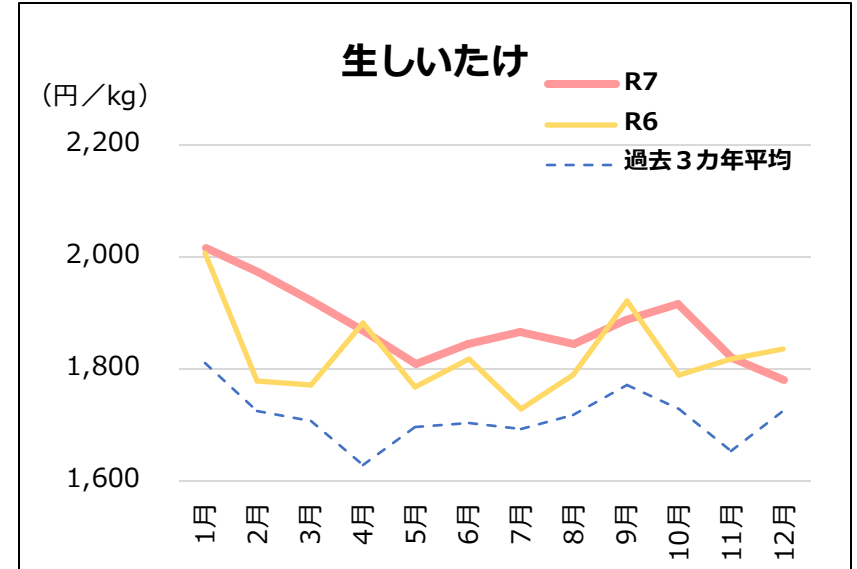
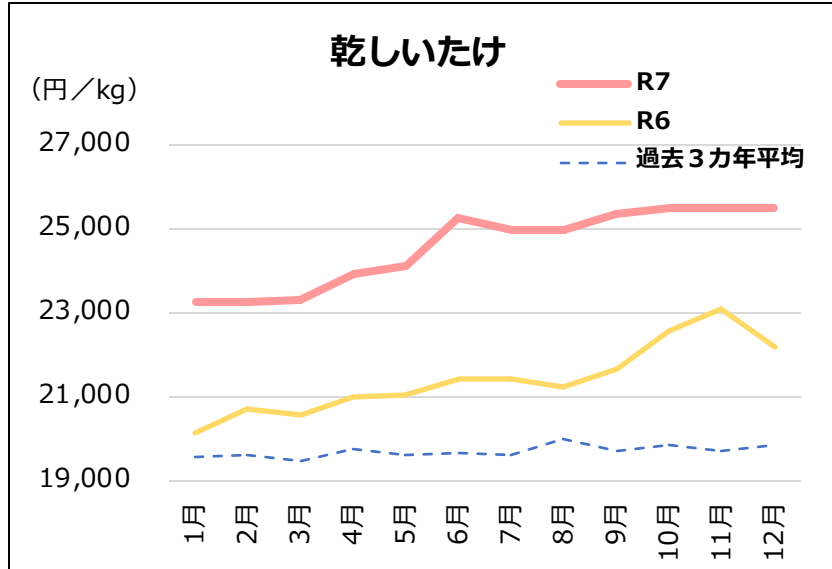


資料：特用林産物生産統計調査をもとに林野庁で推計

注1) 生産者戸数の計上が無い客体からの生産量計上値を含まないため、生産量合計値は公表値と異なる

注2) 一部集荷業者、生産者での重複計上を含む

主要なきのこの小売価格の推移

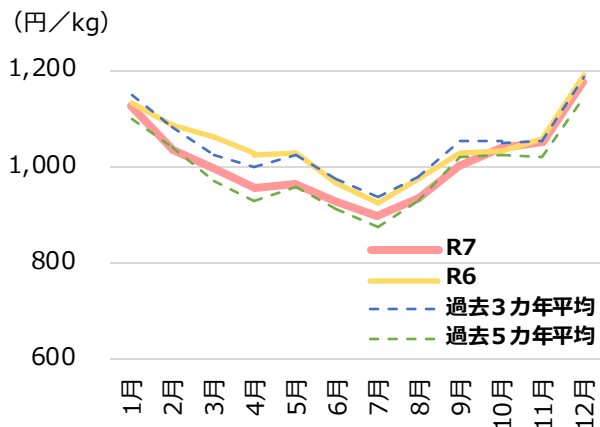


資料：小売物価統計の東京都部小売価格より作成

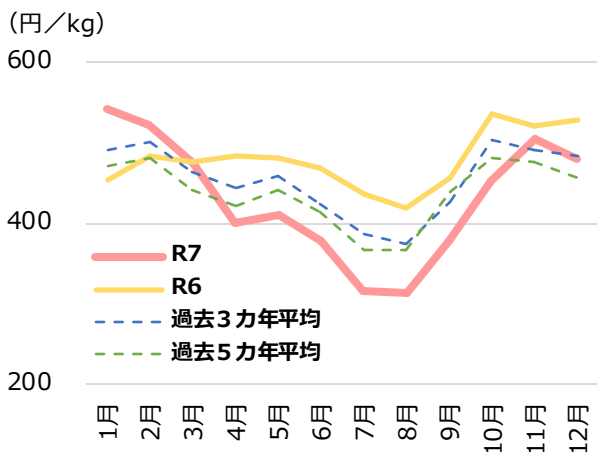
主要なきのこの東京都中央卸売市場における卸売価格の推移

- 令和6年の冬場は、過去数年の中では卸売価格が高かった。
- 令和7年の1～3月は前年からの高値傾向が続いていたが、4月以降は（前年に比べ）卸売価格が伸び悩んだ。

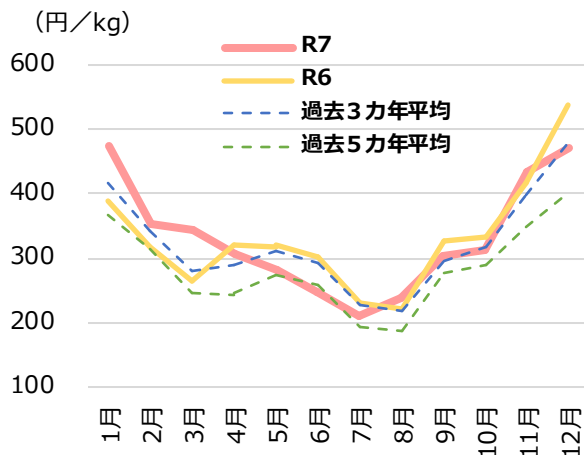
生しいたけ



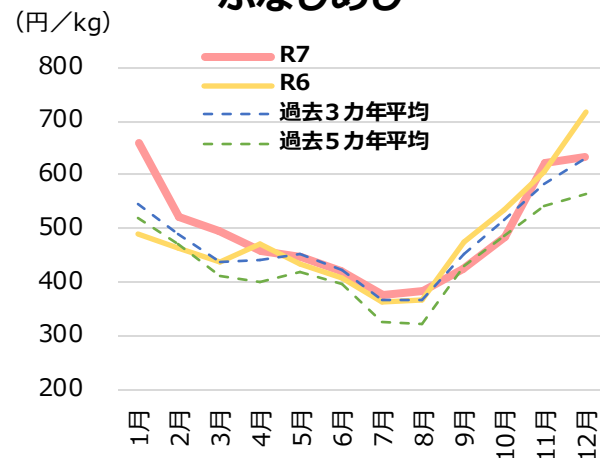
なめこ



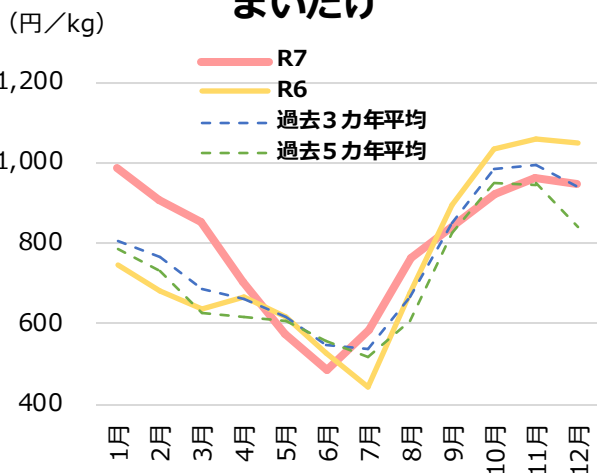
えのきたけ



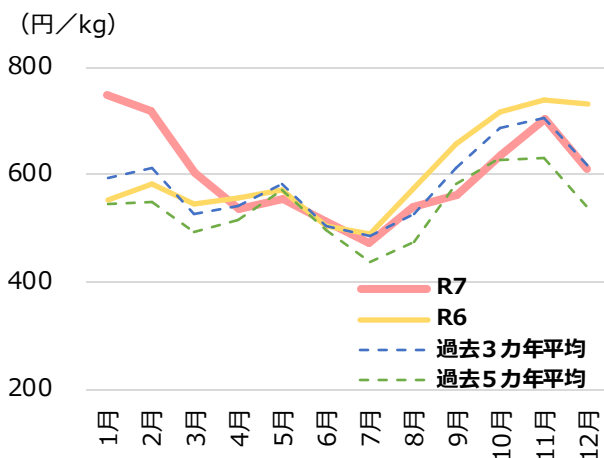
ぶなしめじ



まいたけ



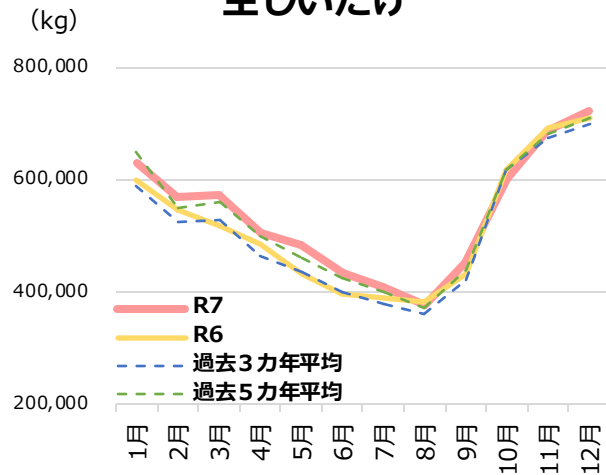
エリンギ



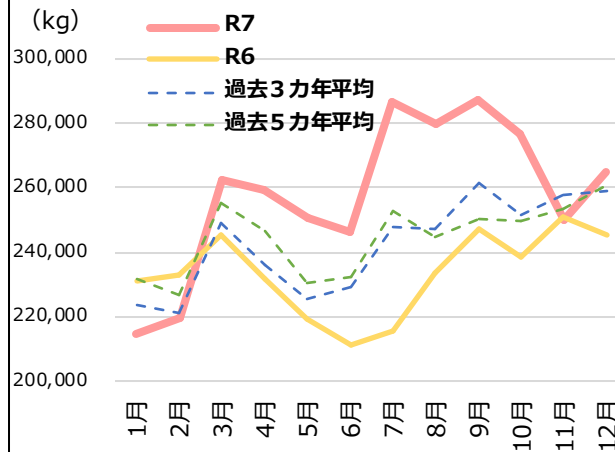
主要なきのこの東京都中央卸売市場における卸売数量の推移

- R7年の生しいたけ、えのきたけ、なめこの卸売数量は、平均を概ね上回ったが、ぶなしめじ、まいたけ、エリンギの卸売数量は平均を概ね下回った。

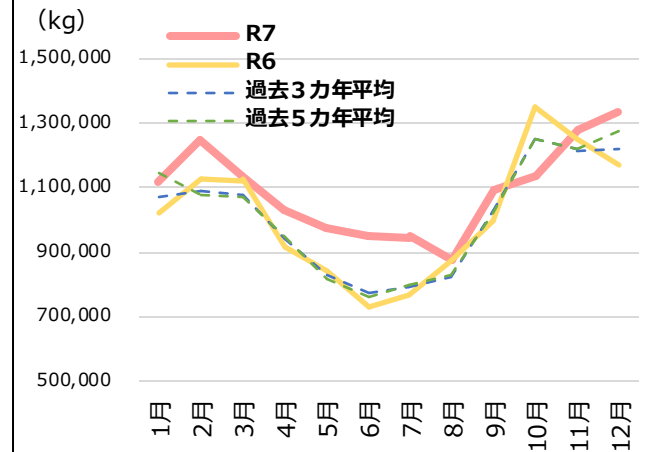
生しいたけ



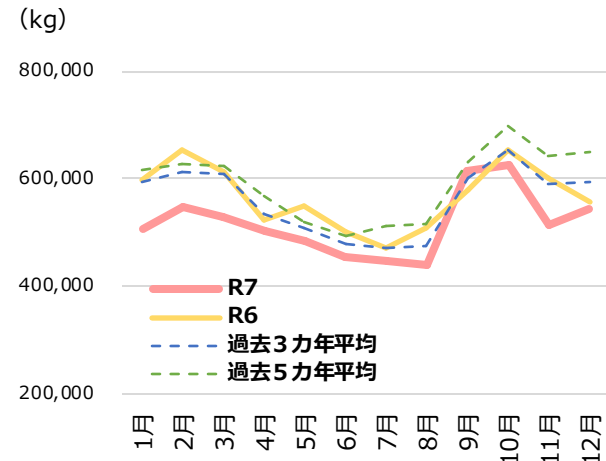
なめこ



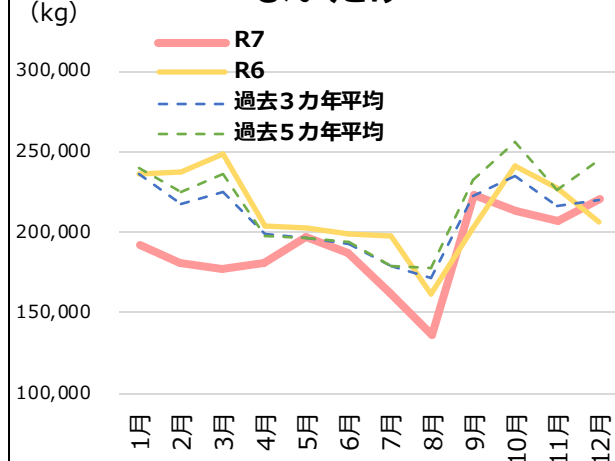
えのきたけ



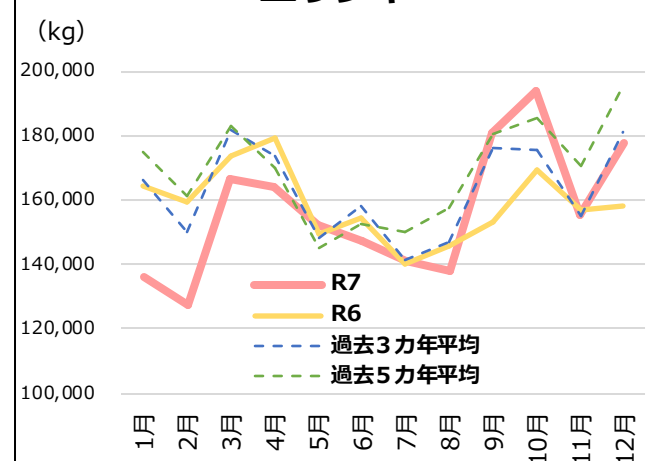
ぶなしめじ



まいたけ



エリンギ

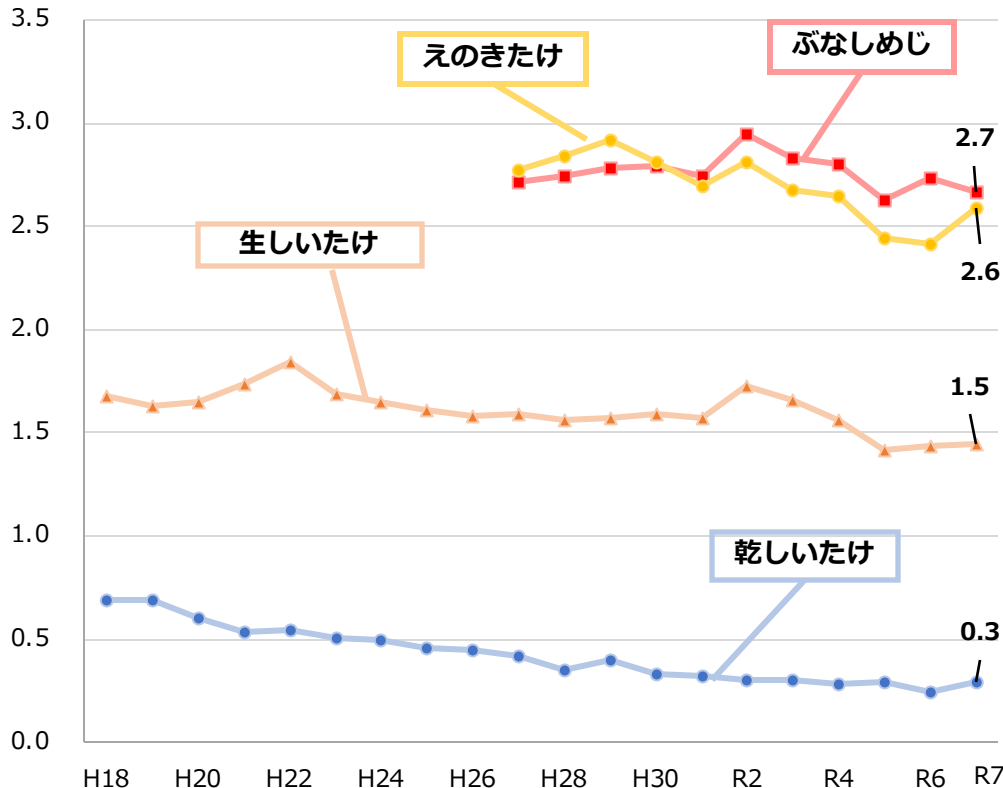


主な栽培きのこの消費動向

- きのこ類の世帯あたり年間購入量は9.5kg。ぶなしめじとえのきたけが2～3kg程度購入されており、生しいたけは1.5kg、乾しいたけは0.3kg（生換算）。
- きのこの一人あたり年間消費量は平成15年以降3.4kg前後で頭打ち。
- 国民の食生活の変化に伴い、乾しいたけの購入量は長期的に減少傾向。

きのこ類の年間世帯購入数量の推移（二人以上の世帯）

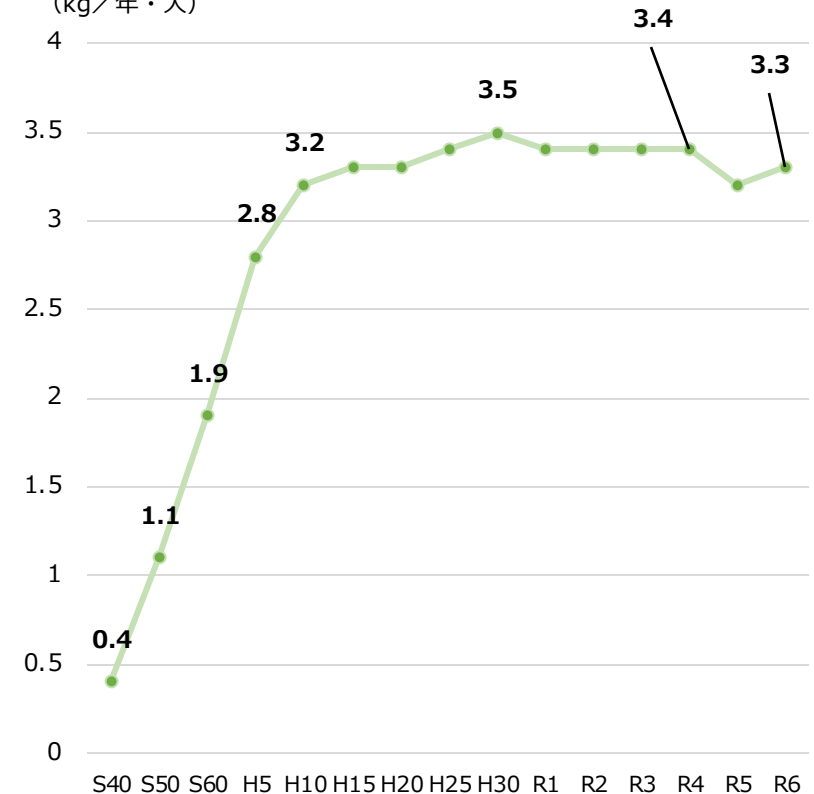
(kg/年・世帯)



資料：総務省統計局「家計調査結果」
注1) 乾しいたけは生重量換算値

きのこ消費量の推移（1人あたり）

(kg/年・人)

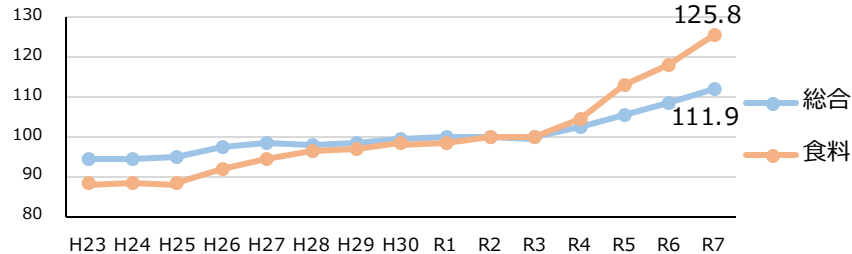


資料：農林水産省「食料需給表」

食料品をめぐる消費者の動向

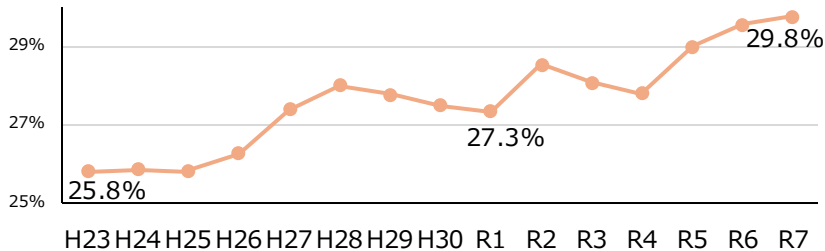
- 消費者物価指数（食料）の上昇が大きく、エンゲル係数（消費支出に占める食料費の割合）も上昇しており、消費者の節約志向が強くなっている。
- 単独世帯や共働き世帯が増加しており、特に若年層では手間がかからない調理方法へのニーズが高い。

○消費者物価指数の推移(R2を100とした場合)



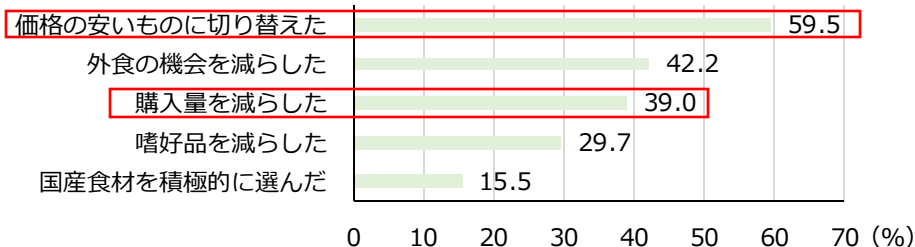
資料：総務省統計局「消費者物価指数」

○エンゲル係数の推移(総世帯)



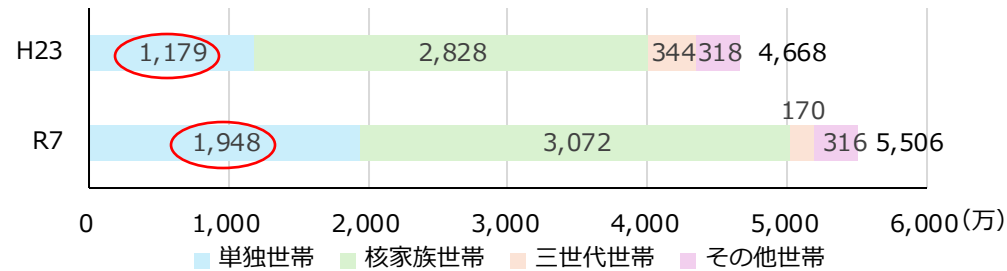
資料：総務省統計局「家計調査結果」

○食料品価格の高騰への対応



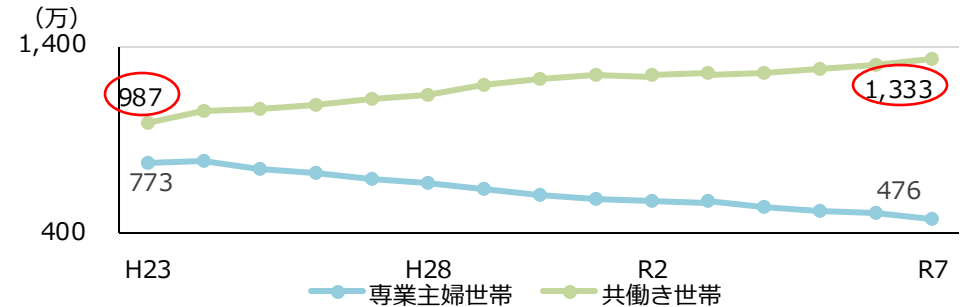
資料：内閣府「食料・農業・農村の役割に関する世論調査」（令和6(2024)年2月公表）

○世帯構成の変化



資料：厚生労働省「国民生活基礎調査」

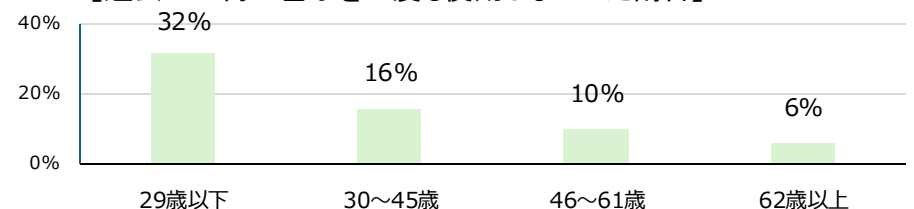
○専業主婦世帯数、共働き世帯数の推移



資料：総務省「労働力調査特別調査」、総務省「労働力調査（詳細集計）」

○調理の簡素化へのニーズ

【過去一か月に包丁を一度も使用しなかった割合】



資料：キューピー株式会社「225年度えがおの食生活研究」（既婚女性1,500人への調査）

消費者のニーズ等を踏まえた商品・販売方法の工夫

- 世帯構成の変化等を踏まえ、単身者等向けの小容量商品やカットきのこなど消費者ニーズに対応した商品が販売。
- 栽培方法の工夫による特色あるきのこ生産を行い、レストラン等への直接販売を行う例や未利用部分を商品化する例が見られる。

○世帯構成の変化等を踏まえた消費者ニーズへの対応

小容量や時短ニーズへの対応

- ・ 単身者等向けの小容量の商品や調理の手間を省くカットきのこ等が販売されている。



小容量（50gや100g）の商品
（200gが一般的）



石づきを除去した商品
（株式会社マイルHPより）



カットえのき
（100g, 200gなど）
（株式会社加藤えのきHPより）



カットぶなしめじ

○付加価値の高い商品展開の例

商品の差別化

- ・ 地域の特産品でもある長いもの粉末をきのこの培地に入れて栽培することで、通常よりも旨味成分が増加



（久保産業有限会社HPより）

鮮度の高い冷凍品

- ・ ぶなしめじ等を収穫後すぐに急速冷凍することで、鮮度が高く、調理の時短にも繋がる商品を販売



（ホクト株式会社HPより）

レストラン等への直接販売

- ・ えのきたけの培地を国産おが粉にこだわり、旨味成分も多いことからレストラン等にも直接販売



（株式会社丸金社HPより）

未利用部分の商品化

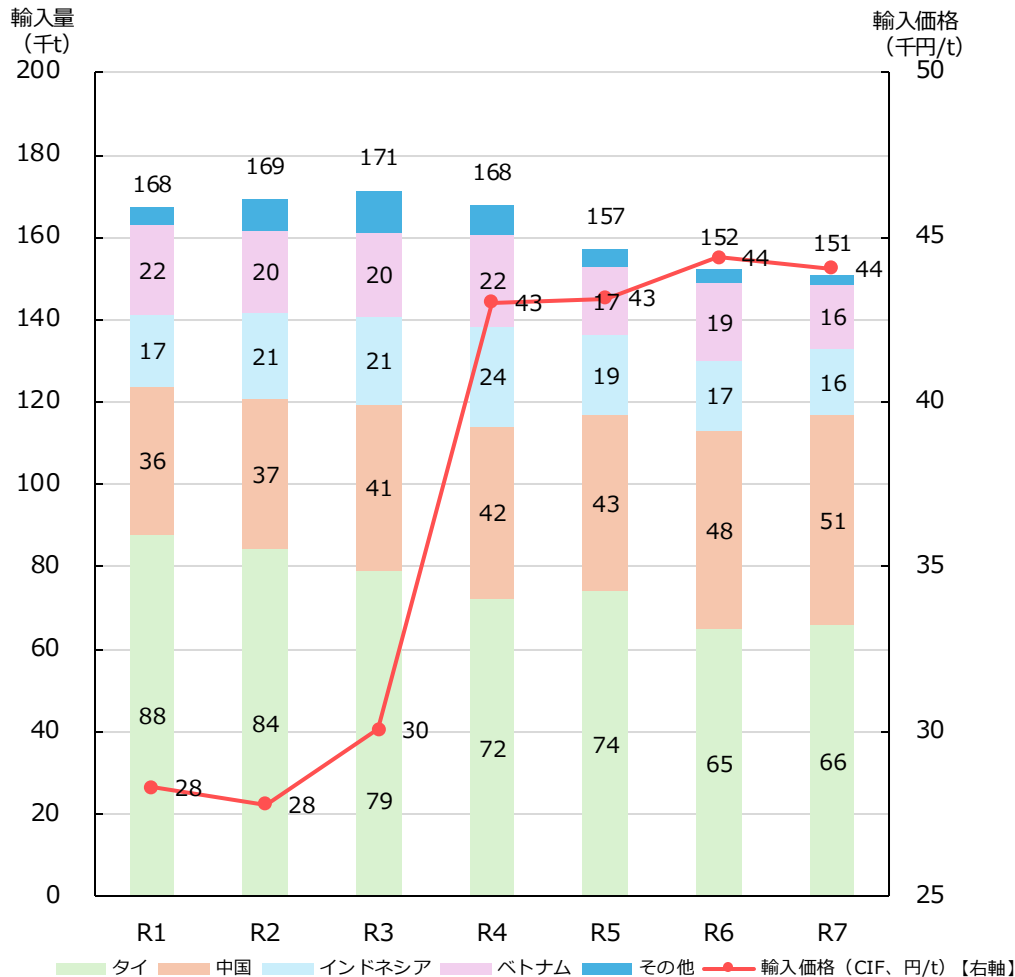
- ・ えのきたけの未利用部分を活用した商品やそのレシピを提案



（株式会社加藤えのきHPより）

- コーンコブ等の輸入量は約15万トであり、輸入先国はタイ、中国で約8割を占める。輸入価格は近年急激に上昇しており、4.4万円/ト程度。
- 海上輸送費が上昇していること、原料のトウモロコシの価格がウクライナ情勢により上昇していること等が、コーンコブ価格に影響していると考えられる。

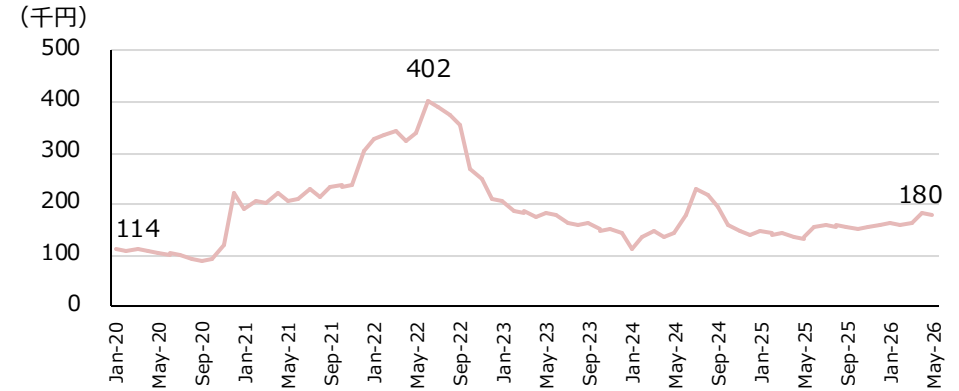
○コーンコブ等の輸入量、輸入価格の推移



資料：財務省「貿易統計」

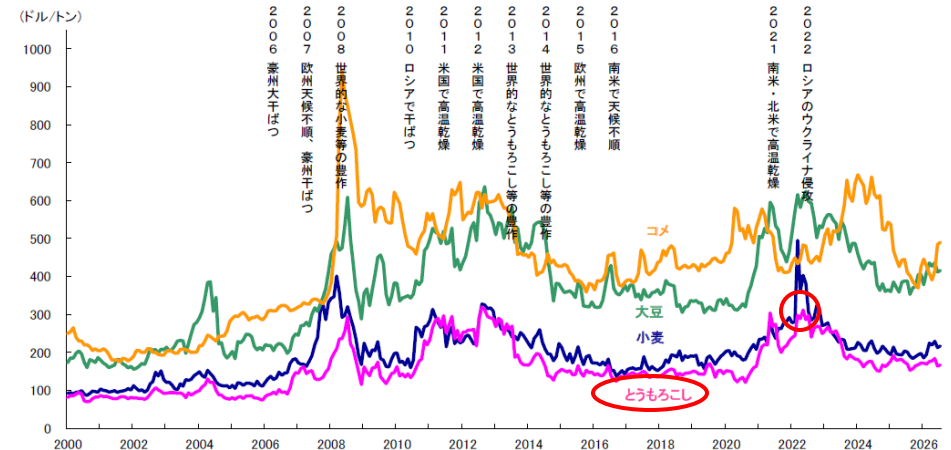
注1) コーンコブが含まれると考えられる「HSコード2308.00」のデータ

○海上輸送費の推移(40ftコンテナ)



資料：公益財団法人日本海事センター「主要航路コンテナ運賃動向」(Laem Chabang-Yokohama)、日本銀行「時系列統計データ」より林野庁作成

○穀物等の国際価格の動向(ドル/トン)

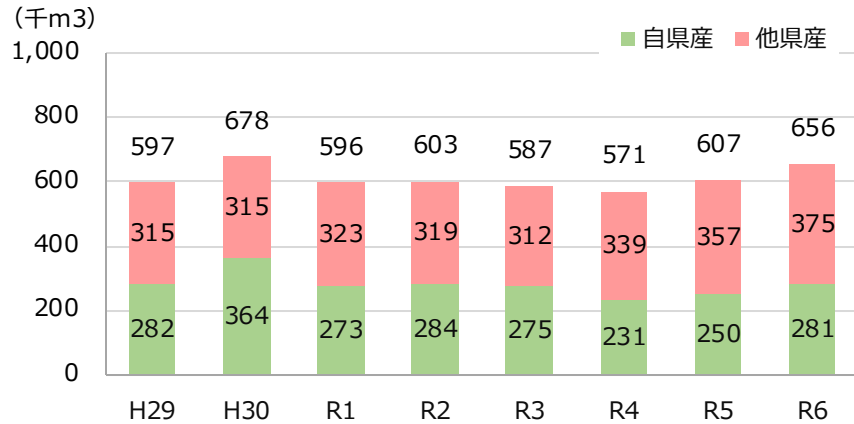


資料：農林水産省HP

おが粉の調達の動向

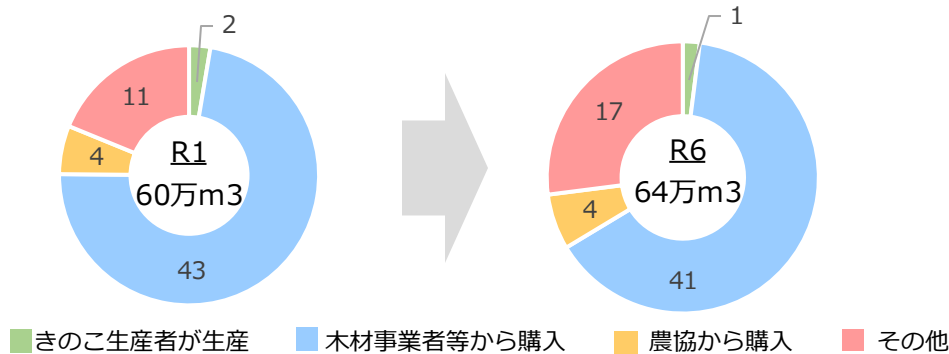
- きのこ生産者はおが粉を主におが粉製造業者や種菌メーカー等から調達しており、県外からの調達量が多い。
- きのこ生産者の一部からはおが粉が不足しているとの声があり、その理由としては仕入れ先の廃業や伐採業者の人手不足等が挙げられている。
- 近年、菌床用おが粉の価格は上昇傾向で推移している。

○きのこ生産者のおが粉調達量の推移



資料：農林水産省「特用林産基礎資料」

○きのこ生産者のおが粉調達先の内訳



資料：農林水産省「特用林産基礎資料」

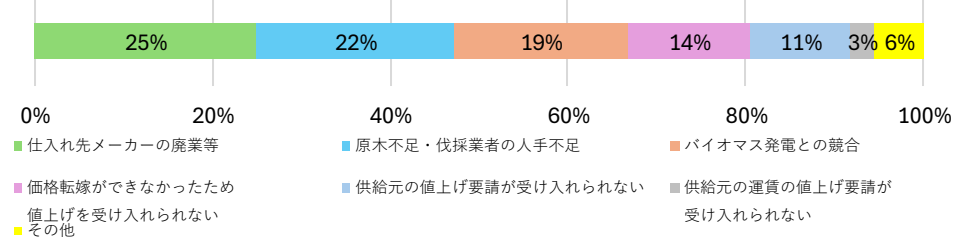
注1) 「その他」には商社、種菌メーカー等が含まれる。

○きのこ生産者のおが粉の調達状況

【きのこ生産者のおが粉調達の状況】

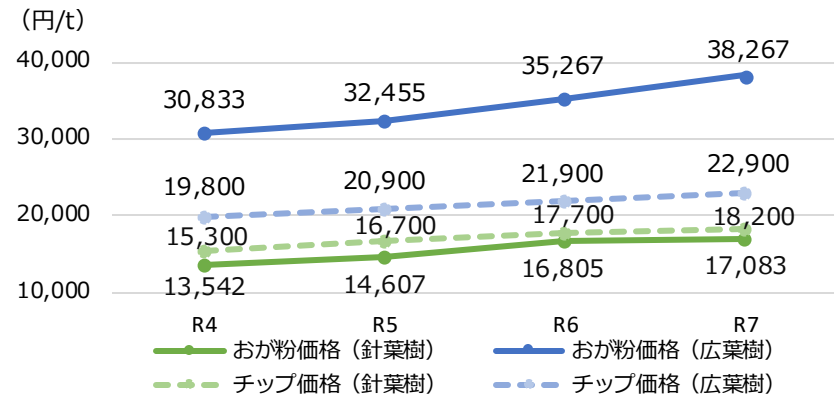


【きのこ生産者の不足感の理由】



資料：日本特用林産振興会「令和6年度 菌床用おが粉の需給に関する調査報告書」から林野庁作成

○おが粉価格の推移



資料：農林水産省「木材価格統計調査」、林野庁業務資料

菌床培地に用いられる栄養体について

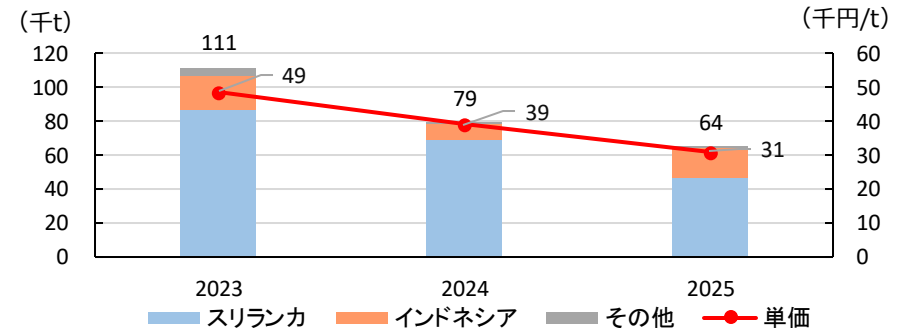
- きのこ菌は培地の木質基材等を分解して栄養とするが、木質基材等のほかに高栄養な資材（栄養体）を用いることで、培養期間の短縮やきのこの発生量の増加等の効果が得られる。
- 栄養体には、米ぬか、ふすま、ホミニフィードといった、精穀時の副産物が主に用いられ、輸入品として調達される場合と、国内で精穀されたときの副産物として製造される場合とがあると考えられる。
- 米ぬかの主要用途であるこめ油の生産量は近年増加傾向にあり、栄養体の需要への影響が懸念。

○栄養体となる資材の国内生産量(試算)

穀物の種類	国内消費量	栄養体の発生率	栄養体の国内生産量
米	740万t	10%	74万t (米ぬか)
小麦	512万t	15%	77万t (小麦ふすま)

資料：農林水産省「食料需給表」、農林水産省HP、木下製粉株式会社HP

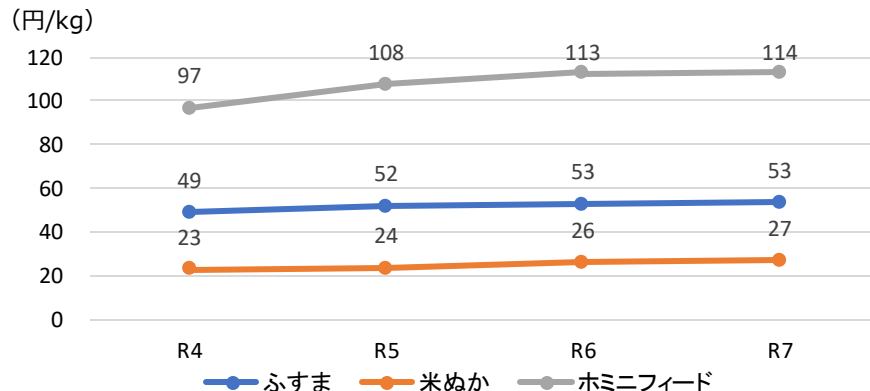
○小麦ふすまの輸入量・輸入金額



資料：財務省「貿易統計」

注1) 「HSコード2302.30ふすま、ぬかその他のかすのうち小麦由来」のデータ

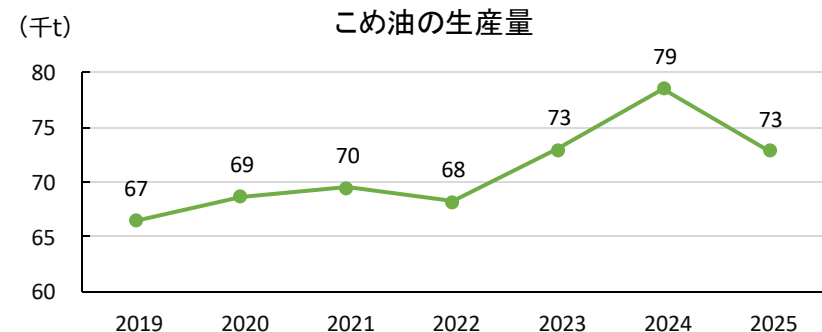
○栄養体価格の推移



資料：林野庁業務資料

○こめ油の生産量の推移

- 米ぬかの主要用途であるこめ油は近年生産量が増加。



資料：農林水産省「油糧生産実績」

国産資材利用の事例

- 輸入コーンコブ利用が主体の品目でも国産おが粉にこだわって生産している例や国内産黒とうもろこしのコーンコブをきのこ生産に使おうとしている例もある。
- 長野県中野市では、国産ソルガム等を使ったきのこ生産の実証が行われている。

○国産おが粉を使ったえのきたけ

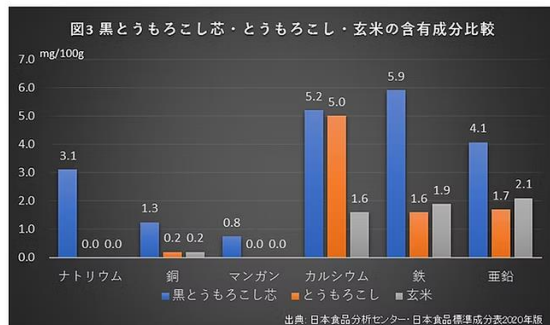
- ・ 長野県の株式会社丸金は、えのきたけの栽培に国産間伐材由来のおが粉を使用。



資料：株式会社丸金より提供

○国産コーンコブの活用事例

- ・ 山形県の日月オフィス合同会社では、国産の黒とうもろこしを生産しており、芯をきのこ栽培に活用。
- ・ 一般的なとうもろこしよりも芯に含まれる栄養が多い。



資料：日月オフィス合同会社HP



○国産ソルガムの活用事例

- ・ 令和4年2月に中野市内関係者で協議会を立ち上げ、培地へのソルガムの活用について検討。
- ・ ソルガムを10%使用した培地で、収量性、品質面ともに問題なく、一般培地と同等の結果



【平均収量・生育日数】

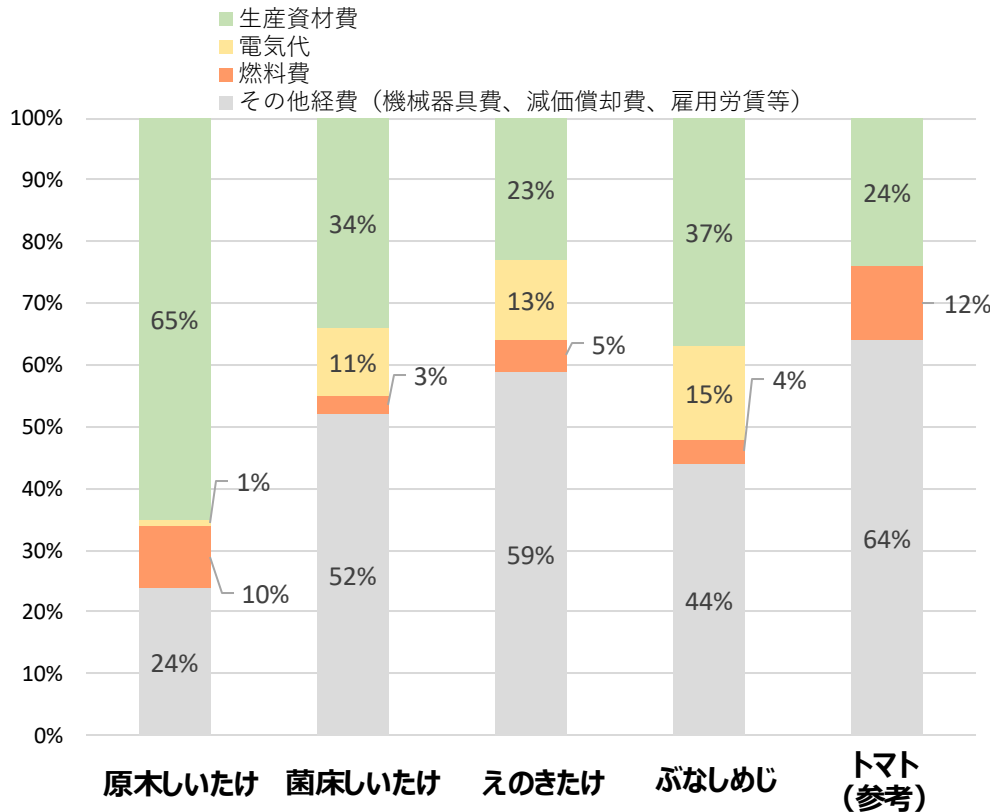
	ソルガム培地	一般培地
平均収量	356.34 g	356.38 g
最大収量	369 g	374 g
収穫日数	26.52日	26.63日

資料：JA中野市広報誌花むすび2023年9月号

きのこ生産における燃料費・電気代について

- 菌床きのこの生産においては、培地の滅菌工程において重油や灯油を活用するほか、ハウスの冷房等に電気を利用。
- 他の園芸作物と比較すると、燃料費の生産費に占める割合は低いですが、通年栽培を行うようなえのきたけ、ぶなしめじなどは、空調に係る電気代の割合が高く、電気代上昇の影響を受けやすい。

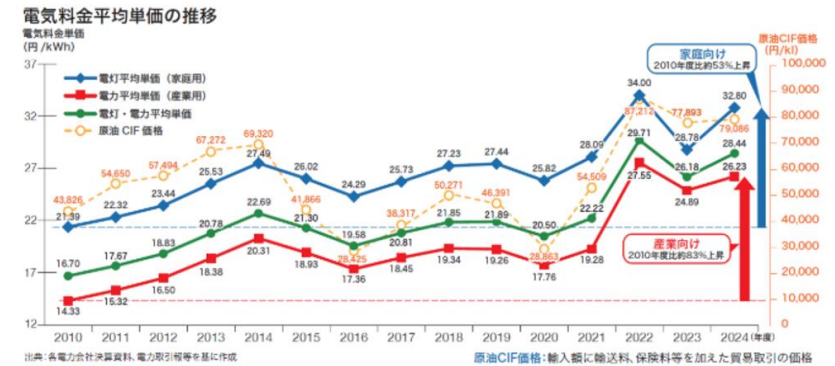
○品目別生産費の割合



資料：林野庁業務資料、2022年度版きのこ年鑑、令和6年農業経営動向分析結果（令和8年1月日本政策金融公庫）から林野庁作成
注1）トマトは燃料動力費を燃料費として表示

○電気料金の推移

- 産業向け電気料金は81%上昇（2024/2010年比）



資料：資源エネルギー庁HP

【参考】木質バイオマスボイラーの導入状況(しいたけ生産)

- 使用済みしいたけ原木を利用しているケースや使用済み培地を利用しているケースがある。

令和6年しいたけ生産者数 (戸)	導入生産者数 (戸)	導入率 (%)
12,393	64	0.5

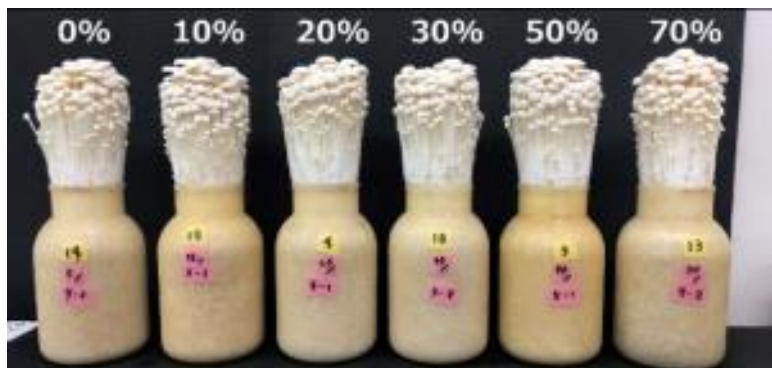
資料：林野庁業務資料、都道府県担当者への聞き取り

使用済み培地の利活用の事例

- ❑ 菌床栽培においては、きのこを収穫した後の菌床（使用済み培地）が大量に発生し、処分にはコストが発生。
- ❑ 使用済み培地は、新しい菌床に混ぜて再利用する取組みのほか、堆肥、飼料、バイオマス発電の燃料等として活用されている。

○使用済み培地のきのこ菌床への再利用について

- ・新潟県森林研究所では、えのきたけ栽培の培地（スギおが粉）をえのきたけ使用済み培地（コーンコブ）で置き換える試験を実施
- ・スギおが粉の10～50%を使用済み培地で置き換えても減収せず、使用済み培地を入れない通常の培地と収量はほぼ変わらなかった
- ・生育日数は30%弱置き換えた場合、1日弱短くなった
- ・一方で、70%～80%置き換えると減収し、100%置き換えると発生しなかった



注：写真の上部の数値は、おが粉に対する置換率（数値が大きいほど、使用済み培地の量が多い。）

資料：新潟県森林研究所HP 森林研究所より
きのこの菌床栽培における廃菌床の利用可能性について（林業にいがた2024年06月号記事）

○使用済み培地の利用の例

堆肥化

- ・JA徳島市は、れんこん栽培において化成肥料主体から使用済み培地由来の有機肥料に転換
- ・腐敗病の割合が大幅に減少し、収量も倍増



（農林水産省HP）

飼料化

- ・東京都の有限会社パルテックは、コーンコブ主体の使用済み培地と穀物を混合させた飼料「げんきのこ」を製造・販売。



（株式会社パルテックHP）

バイオマス発電の燃料として利用

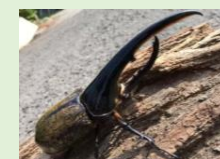
- ・三重県のパワーエイド三重合同会社は、近隣のきのこ工場が発生する使用済み培地と古紙や廃プラスチック由来の燃料を混合して、バイオマス発電を行う



使用済み培地

カブトムシの餌として利用

- ・秋田県大館市の株式会社TOMUSHIは使用済み培地をカブトムシの餌として利用する事業を展開。
- ・2026年現在、全国に100か所以上の処理用のプラントを所有



（株式会社TOMUSHI HP）